

中央自動車道関係遺跡第一次調査概報

— 北巨摩郡長坂町東前田遺跡 —

山梨県教育委員会

中央高速自動車道遺跡第一次調査概報

——北巨摩郡長坂町東前田遺跡——

目 次

まえがき

1. 遺跡の概要

- (1) 遺跡の位置……………6
- (2) 測量の経過……………7
- (3) 東前田遺跡の歴史的環境—塚川高塚群の民俗学的考察—……………9
- (4) 遺物包含層の調査 —縄文文化初頭の遺物について—……………19

2. 遺跡の発掘調査概要

- (1) 1. 10. 11. 12号 塚……………30
 - (イ) 塚の形状と地貌……………30
 - (ロ) 発掘調査の経過……………31
- (2) 7. 8号 塚……………36
 - (イ) 塚の形状と地貌……………36
 - (ロ) 発掘調査の経過……………40

まえがき

遺跡は考古学徒にとっては、研究の場であり、又発掘調査の対象であるが、発掘は遺跡の破壊であることはいうまでもない。

近年各種の開発事業によって、遺跡を含めての埋蔵文化財の破壊がいちぢるしく、学術的な本来の発掘調査と比べ、はるかに大規模に失なわれてゆくのが実状である。

今回中央高速自動車道路の建設にあたり、(小淵沢～葦崎市間)その路線内に埋蔵されている埋蔵文化財に対して、日本道路公団と県教育委員会との間で数回の協議を重ね、文化庁の指導の下に工事前の緊急発掘調査をおこなうことになり、昭和44年3月中旬～下旬にかけて発掘調査を実施することになったのである。

従来八ヶ岳山麓地方の組織的な考古学発掘調査は隣接の長野県側に比してその事例は甚だしく少ない。戦前には私は師である大山・柏博士(大山史前学研究所)を中心に竹下次作氏らと共に穂坂の飯米場遺跡や長坂上条遺跡の調査がある。

戦後になってからは、志村滝蔵氏や郷土研究会員による坂井遺跡の発掘調査(昭和22年)山本寿々雄氏担当の長坂上条遺跡を中心とする石造遺構の調査(昭和27年)八幡一郎氏担当による天神前遺跡の調査(昭和29年)などがあげられ、各々学界に報告されている。

又古くは北巨摩郡教育会が郷土研究の第一輯として刊行した『先史原史時代調査』昭和7年などは、その企画とともに図版、写真など今日においても資料価値は失っていない。

さてこのたびの発掘調査地である長坂町、塚川東前田の山林は北沢豪氏所有地で、近辺にあるマウンド等は古く甲斐国志などにも紹介されているところではあるが果してこの種のマウンドそれ自体どのような意味で造成されたかは全く記されたものがなく、その実真相はどういうものであるかは発掘調査の結果を総合的に考察しなければならないのであるが、中央高速自動車道の道路敷になって消える前の緊急調査としてとりあげられる意義は深いものがあるかと考えるのである。又別に遺物包含層についても、発掘区を設定して調査をおこない、更には重鋳物組成の分析をして今後の参考とすることにした。本書においては以下各項目において各々担当した調査員がその実施結果をもとにして、概報の形でとりまとめることになった。各々調査員諸氏の考察の結果をそのままの形で所収したが、一つの見方として今後の参考となれば幸である。

春いまだ浅い八ヶ岳の麓できびしい寒風にもめげず、黙々とその任にあたられた調査員各位

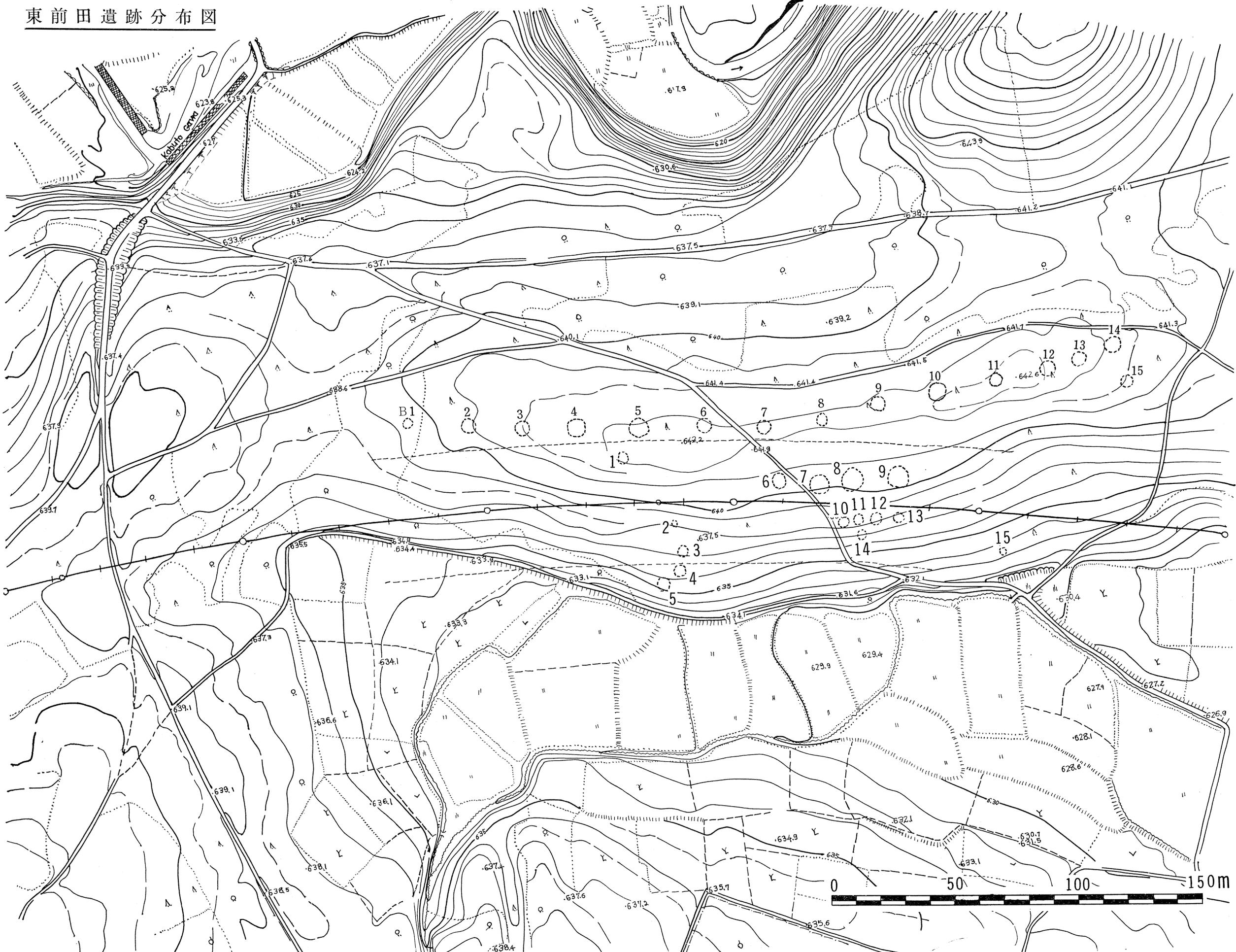
をはじめ，それらの補助員諸君，又関係各機関の方々には真摯な態度で最後まであたられたご
労苦に対し満腔の敬意を表わすものである。

昭和45年3月

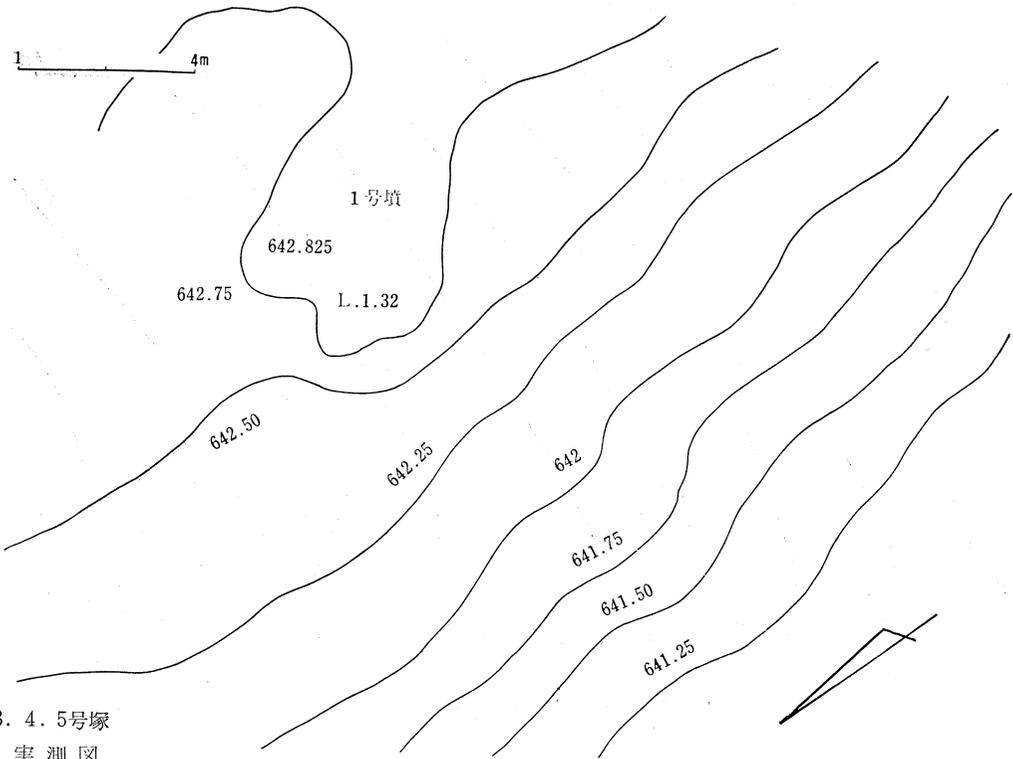
中央高速自動車道葦崎小淵沢間

山梨県遺跡調査団団長 井 出 佐 重

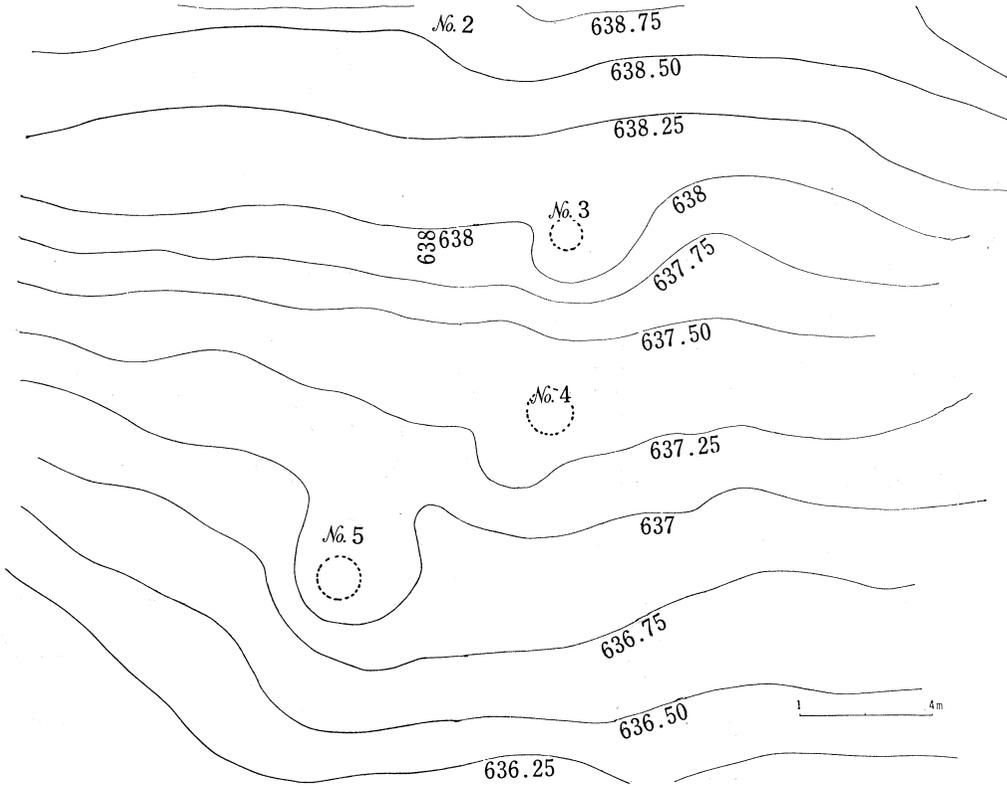
東前田遺跡分布図



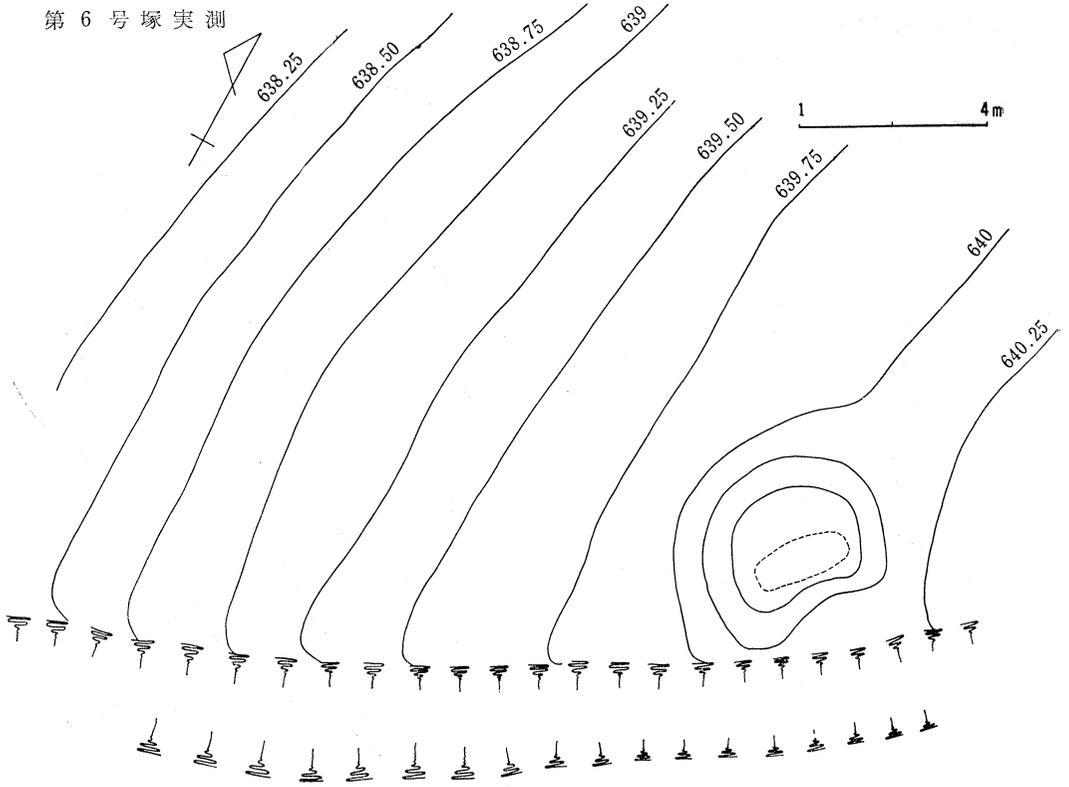
第 1 号塚实测图



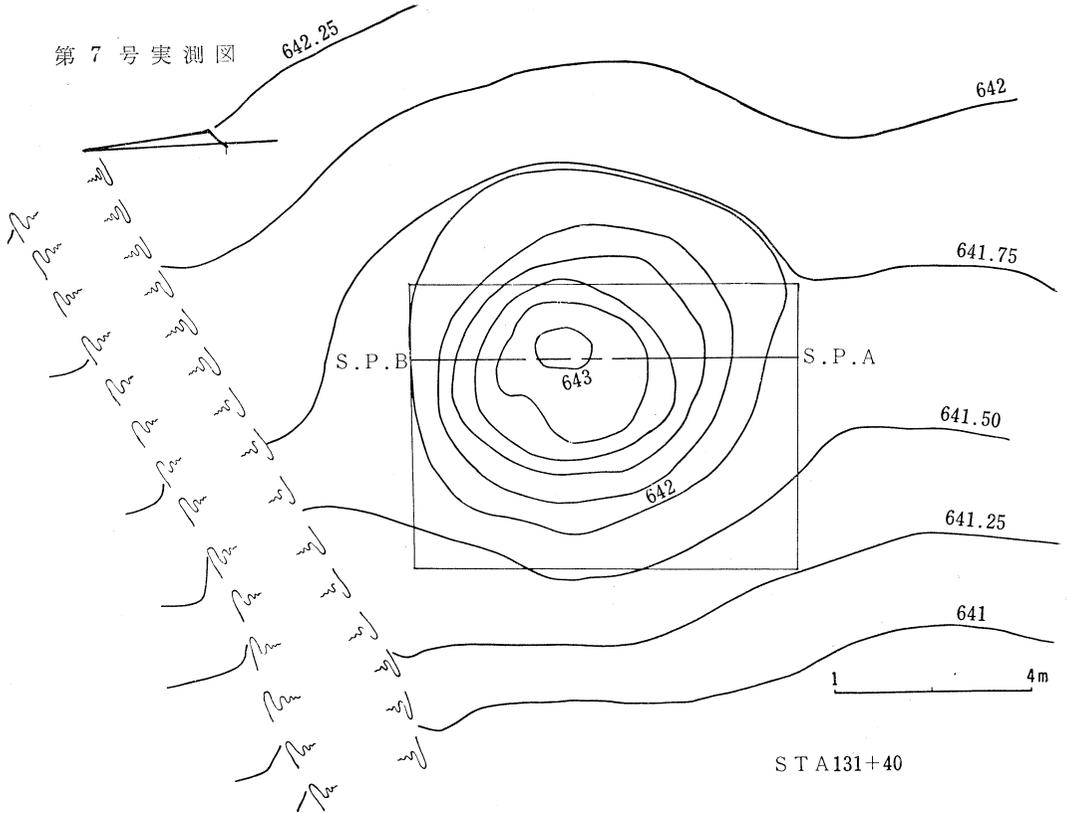
第3. 4. 5号塚
实测图



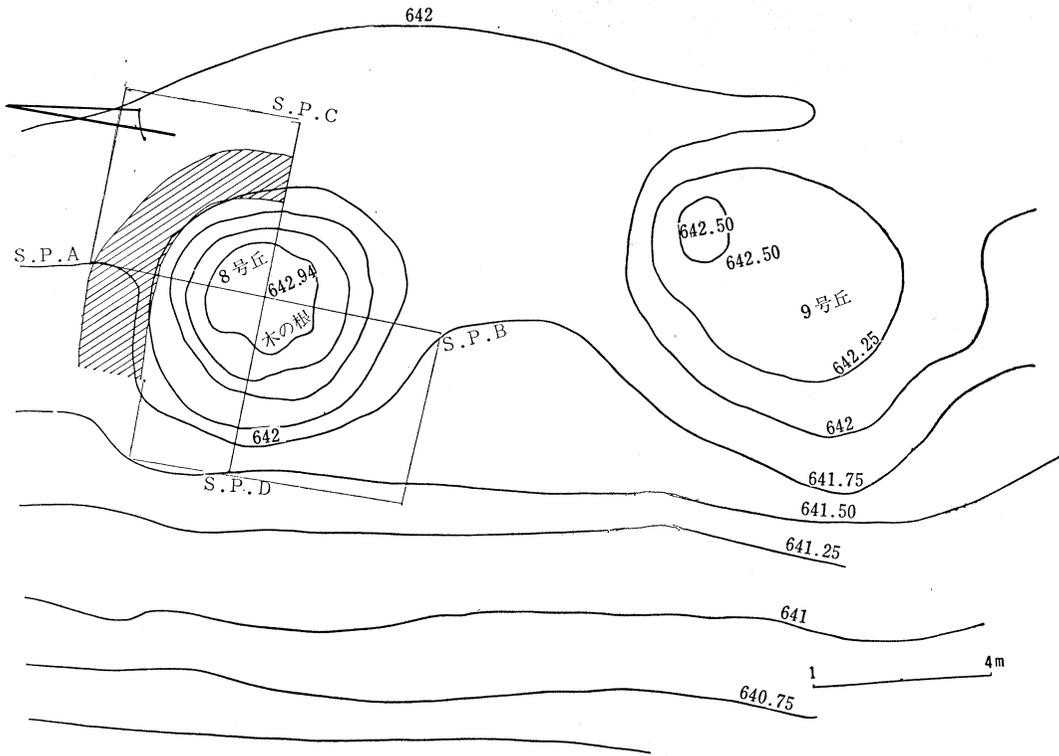
第 6 号塚実測



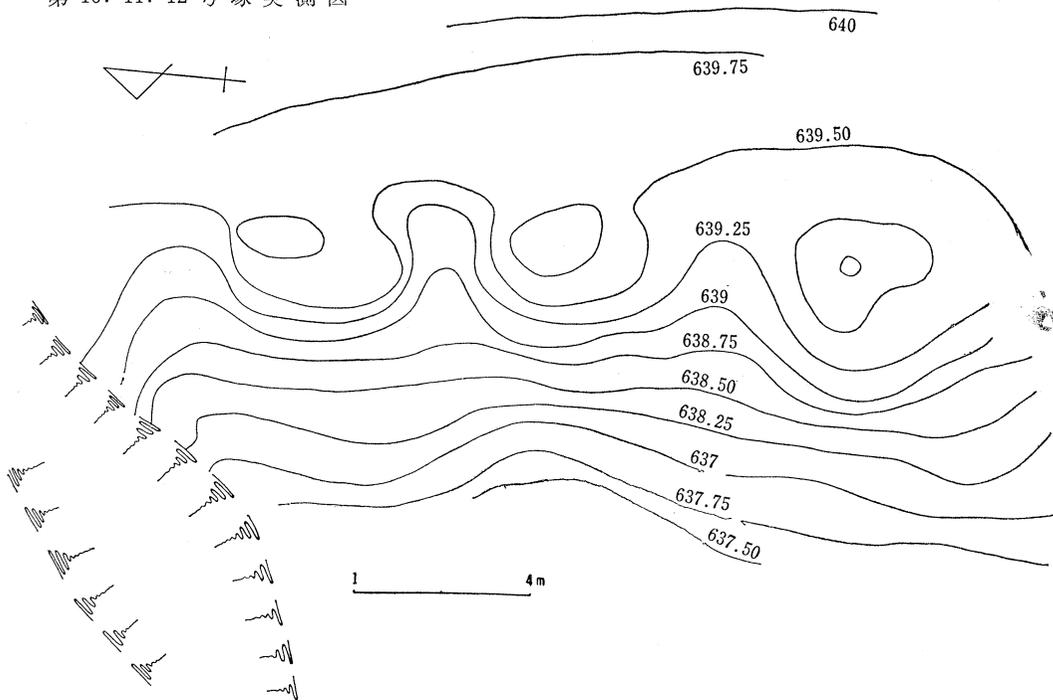
第 7 号実測図



第 8. 9 号塚実測図



第 10. 11. 12 号塚実測図





第 1 号 塚



第 4 号 塚



第 2 号 塚



第 5 号 塚



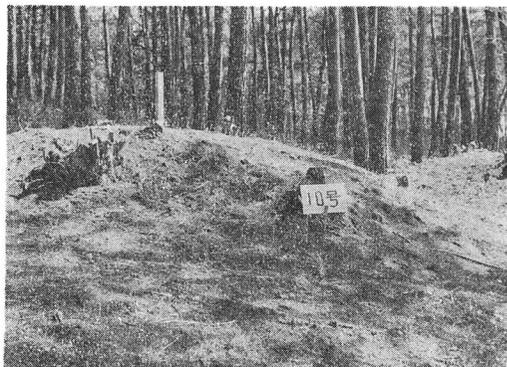
第 3 号 塚



第 6 号 塚



第 7 号 塚



第 10 号 塚



第 8 号 塚



第 11 号 塚



第 9 号 塚



第 12 号 塚

遺 跡 の 概 要

谷 口 一 夫

(1) 遺 跡 の 位 置

山梨県の北部—いわゆる北巨摩郡は八ヶ岳の広大なすそ野の上に占地している。この広大な八ヶ岳のすそ野には、八ヶ岳を核として無数の放射状の谷が構成されており、ここに紹介するところの北巨摩郡長坂町東前田の小丘群遺跡もこの放射状に放たれた谷間に造られた一つの丘陵上に築造されたものである。

小丘群遺跡のある東前田の丘陵は、ほぼ東西に流れる丘陵で西方間近に八ヶ岳、東方に甲府盆地をはさみ遠方に大きく霊峰富士を望む位置にある。

仮りにこの丘陵を東前田丘陵と呼ぶことにする。

東前田丘陵の巾は小丘群遺跡のほぼ中心点当りで約180米、そしてその頂点の標高は642米となっている。頂点は丘陵上若干南よりである。丘陵北側の谷底部標高は615米、南側谷底部標高が630米で、丘陵南側傾面の方が北側傾面よりゆるやかになっている。

小丘群はこの頂点より南側にのみ認められる。

小丘群の配列は分布図に示されたとおり、東前田丘陵の陵線に添って、ほぼ25米の等間隔に15基が認められるのをはじめ、その南側に15基、計30基が存在している。

この後者の15基は、前者の15基とは異なり、四基づつ（6～9号小丘、10～13号小丘）陵線と併行して走っているものを除けば、あとは不規則に点在している。そして、この後者の15基中には既に発掘により盛土が消滅しているもの（14号小丘）、さらに盛土が風雨により流され、原形を留めていないもの（1号、2号、9号、13号小丘）も含まれ、ほぼ原形に近いものは10基となっている。

中央高速自動車道予定路線は、この後者の15基をすっぽり包含している。

測量班の作業は、この予定路線内の小丘についてのみ墳丘並びに地形測量を行なった。その作業経過は別項の通りである。

測量に基づく各小丘の規模は次表の通りである。

() 内数字は復原推定数値 直径は最長の巾とした

	直 経 (米)	高 (米)	備 考
1 号 小 丘	5.8	0.4	
2 号 小 丘	-	-	盛土流出で原形留めず

3号小丘	4.0	0.30	
4号小丘	4.0	0.30	
5号小丘	4.0	0.30	
6号小丘	6.0	0.62	
7号小丘	8.0	1.36	
8号小丘	9.0	1.29	
9号小丘	-	-	盛土流出で原形留めず
10号小丘	4.9	{0.37最高 1.39最低	
11号小丘	7.17	{0.72〃 1.44〃	
12号小丘	4.75	{0.56〃 1.36〃	
13号小丘	-	-	
14号小丘	4.0	-	密掘により原形不明
15号小丘	-	-	未測量

測量結果に基づく総合所見としては、路線外の陵線に走る15基と並行して走る6～9号小丘、10～13号小丘がそれぞれ東前田丘陵南側傾面に出来たゆるやかな雛段の上に占地されている。この点は本小丘群築造上からも全く無意味とは考えられない。盛土に使用したか、故意に雛段を造ったかは即断出来ないが、この点は測量により確認されている。

また、小丘の全てが盛土により築造されたもので、その各小丘の規模は前記の通り、大きくはない。発掘調査班の報告でもふれられているが盛土は柔らかく風雨によって、小丘の全てが多少の差こそあれ西南部にその盛土が流されてもいる。なかには殆んど原形を留めない小丘もみられる位である。したがって測量結果によっても、その正確な直径及び小丘高さを見出す事は非常に困難なことで、細部に亘っては復原による推定数値に頼らざるを得ない結果ともなった。

また、この東前田丘陵帯は詳細な踏査を続けたが、それでもなお下草にかくれ幾つかの未確認の小丘も存在する可能性はあるとみられる。15号小丘の如きは全ての作業が終了後に発見されたわけである。

2 測量の経過

東前田小丘群調査に当って、当初測量班で検討を要さねばならなかった問題は、まず、この遺跡の主体となっている遺構—いわゆる小丘群が、その数、配列、規模からして常識的な古墳として扱えるか否か、ということであった。

したがって、後日の調査結果いかんでは、出土遺物皆無ということも充分に予測されたた

めに、発掘調査以前の測量という作業には万全を期さねばならないという結論に達した。

この為、測量班には山梨考古学研究会員である上川名昭、川崎義雄氏（両氏とも日本考古学協会員）及び同じく明治大学考古学専攻学生末木健君、同じく立正大学考古学専攻生堀口八重子君、それに高校生の山田、久保の両君の献身的な協力を頂いたなかで作業が進められることになった。これ等各位には銘記して謝意を表する次第である。

測量班作業日誌からその経過を追ってみたい。

第1日（昭和44年3月21日）雨のち晴れ、作業開始午前12時40分、作業終了午後5時0分
午前8時40分県議会議事堂前に集合、三台の車に分乗して現地に10時に到着。早速下草刈り、及び地鎮祭の準備に入る。11時井出佐重団長等出席の元に地鎮祭を開催、その後、現地丘陵全域の下見を行なう。昼食後12時40分から測量作業を開始する。

まずSTA130+169.9の位置、標高640米を起点とし7号小丘の近くに640, 641, 642, 642.5のポイントを東西に、又東側に2本のポイントを打つ。7号小丘頂点レベルは643.12で25糎米のコンターを入れる。測量図は全て40分の1に統一、コンターは25糎米間隔とすることにした。ほぼ7号小丘の実測を終えたが、7号小丘の東北部は以前に若干破壊された様相であり、かつ西に盛土が流れている様子であった。なお、70号小丘発掘の為のトレンチ南北8米、巾1.5米を設定し第1日目の作業は終了した。

第2日（3月22日）晴、強風、作業開始午前9時0分、作業終了午後4時30分

10, 11, 12号小丘の測量を午前中に完了させる予定で作業開始、11号小丘東に平板ポイントを設定する。各小丘レベルは10号が639.70糎米、11号小丘が639.78糎米、12号小丘が639.68糎米である。この3小丘の東側には平坦部が約2米巾で存在、丘間の高レベルの所ではコンターの間が狭いが、638米位になると逆に扇状地的に広がりを見せている。これは破壊された14号小丘の凹地の為であると考えられる。各小丘は地山の斜面にそって、盛土が流れているので構築当時の状態を知る為には東西へのトレンチを入れる必要があると考えられる。

午後8号小丘、9号小丘の測量に入る。8～9号小丘の中心部の間隔は12米、9号は完全に破壊されており西南部に流れている。

8号小丘も西南方向に盛土が流されているが、この二つの小丘の東側に若干の凹地が確認されるが、これは破壊によるものか、構築時点で出来たものか……発掘で確認されるものと思われる。

第3日（3月23日）晴、作業開始午前9時0分、作業終了午後4時30分

午前中第三班（遺物包含層調査班）の地形測量にかかる。

637米のコンターを移動させ平板を設定眼高2.20米から開始する。この部分は西に開いた

微凹地である。東西に入れたトレンチ東から30釐米で巾2米、深さ30釐米位いの溝が存在するが図面上コンターには現われていない。

午後367米以低のコンターに移り道路まで入れる。

第4日(3月24日)快晴,作業開始午前9時0分,作業終了5時30分

午前中第三班の南北トレンチの東面セクション,東西トレンチの南面セクションの実測を行なう。複雑な層位で時間を費やす。午後2~6号小丘の測量,七号小丘のセクション実測を行なう。

第5日(3月25日)晴,作業開始午前9時0分,作業終了午後5時0分

8号小丘セクション実測を行なう。同小丘は盛土の状態はすこぶる良好な姿で,ほぼ原形を留めている様子である。微細図の作成で作業を終える。

第6日(3月26日)晴,作業開始午前9時0分,作業終了午後5時0分

8号小丘A区の微細図及びセクション実測から作業を開始する。午後1号小丘の実測にかかる。同小丘は盛土が流され原形は全く留めていない。

第7日(3月27日)快晴,作業開始午前9時0分,作業終了午後5時30分

七号小丘,東西セクションの写真撮影及び微細図実測を行なう。地形測量は本日全ての予定を終了した。

第8日(3月28日)晴のち曇り,作業開始午前9時0分,作業終了午後5時30分

測量班としての作業は,昨日で地形測量を完了した為,第二班発掘班(7,8号小丘)に順次労力を回し,作業に伴う平面図作成セクション実測を行なう。

第9日(3月29日)雨のち曇り,作業開始午後2時0分,作業終了午後6時0分

7号小丘平面プラン実測を完了する。雨中の作業となった。

第10日(3月30日)雨のち曇り,作業開始午前9時30分,作業終了午前11時0分

最終整理の為,雨中マウンドに立つ,雨足すこぶる強い中で8号小丘の平面図を作成,一応調査を完する。

なお,最後に付記したいことは,調査期間中,山梨考古学研究会飯島進氏(第2班発掘班々長)に1日数回となく宿舍~現地間の調査員輸送の労をわずらわした点をご報告申し上げこれが為調査が円滑に進められたことに対し深甚なる謝意を申し上げる次第である。

(3) 東前田遺跡の歴史的環境—塚川高塚群の民俗学的考察— 野 沢 昌 康

今次調査の行なわれた塚川における高塚群の分布状況,形態,構造等は,本県にこれまでみられなかった特質なものであるが,北巨摩郡下には,これと同様な小さい高塚群が各所に

存在している。私はそれらの現状を調査することによって、塚川における高塚群の性格を考えてみたい。

北巨摩郡下における小、高塚群

(1) 概 況

北巨摩郡下の古墳の分布は昭和7年の同郡教育会の調査によれば僅か15基にすぎない。その後の調査によってこの数は若干ふえているが、本県としては郡内、河内とともに古墳分布の稀少地域といえる。富士塚、経塚も若干みられるが、それよりも驚くべきは、高さ1メートルにも達しないような、土だけで築いた小円丘が未開墾の山林、原野に夥しく存在していることである。

いずれも人家に近い所に、道路に平行したような状態で並んでいるのに、これまで殆んど報告もなく、大部分に名前さえついていないことは実に珍らしいことといえよう。これらの存在が余りにありふれたためか、或は余りに小さい盛土にすぎないためか、とに角、その築造の当時は、恐らく住民全体にかかわるような大きな意味をもち、多数の協力によって築かれたものと想像されるのに、現在に至っては、その大部分は伝説さえも持っていないのである。

北巨摩郡下のこうした小さい高塚群の存在については、郡誌、町村誌をはじめとして管見では殆んど報告がない。僅に甲斐国志に2箇所記されていて、それを北巨摩郡勢一班が引用しているだけである。即ち今の韮崎市穂坂町宮久保の十三塚（山川部1 巨摩郡北山筋及び古蹟部九 巨摩郡北山筋）と須玉町上津金の十三塚（古蹟部十 巨摩郡逸見筋）である。北巨摩郡下の小、高塚群を筆者の調査した範囲でまとめると次の如くである。（不確認のものは括弧でかこむ）

韮崎市穂坂町宮久保	3	
須玉町上津金	2	
◇ 黒森		(13)
長坂町夏秋	10	
◇ 大八田下村	11	
◇ 南新井	2	
◇ 塚川東林	22	
高根町下蔵原	15	
◇ 中蔵原	12	
◇ 上蔵原	11	

◇	村山西割上ノ坂	2	(5)
◇	◇ 中学北	1	
◇	◇ 御山		(7)
◇	◇ 老が森		(3)
◇	宮地	6	
◇	大林	1	(1)
◇	箕輪	4	
◇	箕輪新町	1	
◇	東横森	5	
◇	村山北割大久保	23	
◇	◇ 新町旭間	2	
合 計	18か所	133基	

ほかに近年まで存在していたもの及び未確認のもの

5か所 29基

北巨摩郡は地域広大であるのに人口密度が低いので、部落と部落の間に未開墾の山林，原野が多いが，高根町，長坂町の場合は，そうした場所に多数の小塚が並んでいるのであった。

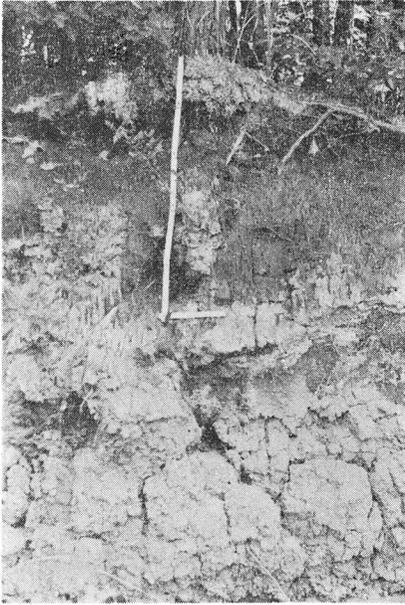
これら小塚の特色を概観すると，

位 置 この郡の地形は南低北高で，北方，長野県境方面に八ヶ岳その他の高山がそびえ，その南斜面に，ほぼ南北に（多少，東西にふれて）侵蝕谷と須玉川，西川，甲川，鳩川，深沢川等が走っている。塚の列は，河川と河川の間丘陵上に，その斜面の方向に従って走っている場合が多い。そして多くは部落間を結ぶ道路に並行している。

配列の状況 地勢の走向に従ってほぼ南北に一列に並ぶものが多いが，必ずしも正確ではなく，弓なりになっているのも，直角に曲っているものもある。一列ではなくて，村山北割のように四列になっているものもある。塚間の距離も十数メートルという所が多いが，3・4メートルに近接しているもの，数十メートル離れているものもある。

形 態 古墳や富士塚と著しく相違している点は，これらの高塚が概ね甚だ小型であることで，場所によって多少の差はあるが，大部分は直径4メートル前後，高さ5～60センチメートル程度の円形で，傾斜のある場所では楕円形にゆがんでいる。しかし大きさは一定していないで，中にはあたかも兵隊を引率している分隊長，中隊長のようなズバぬけて大きいものも存在している。

内部構造 この塚は凡て土を盛ったもので、中には何らの石積みも、あるいは中央に穴を掘って遺体、器物等を埋めた形跡も見られない。写真は、たまたま最近、道路で真二つに切りとられた高根町中蔵原の第三号塚であるが、平坦な地面に単純に盛土したことが明白



高根町中蔵原3号塚 折尺の部分が盛土したもので、それ以下の層はもとの地層である。

白にうかがわれる。

村山北割その他のいくつかの塚に、その頂上を掘りかえしたもので、真二つに封土をとり去ったものがあつた。殊に最近、掘りかえした例が多かつたが、何れの場合も埋蔵物があつたらしい形跡がなかつたし、そういう噂も耳にしなかつた。このことは今回の塚川群塚発掘調査の結果にもみられたところで、たまたま混入したと思われる土器片等のほかは、意識的に埋蔵したと推定されるものは発見されていない。これはこれらの塚の性格を考える上に非常に重要な事柄である。

伝説その他 戦場で討ちとつた敵13人の屍を埋めたという須玉町黒森の例、検地と関係した帳塚であつたという上津金の例、郷或は莊の境界

を示すものという宮久保の例、十三仏信仰によるものという甲斐国志の例、祖先の奥津城である塚川その他の例、一族の守り神（祝い神）をまつた例、先祖の信心者が入定したという長坂町南新井の例などがあつたが、これらの百数十基に比すれば一部分にすぎず、それも古老の話などによつて推察すると、これらの塚、築造の意義を全く忘れてしまつた近世末頃から生れた伝説或は信仰が多いように思われる。大部分の塚が無名であるように伝説すらも生れなかつたのだとも言えるようである。

これらの中で13塚と呼ばれてきたものが2か所、13人塚と呼ばれてきたものが、1か所あつたが、13塚の研究については古くは柳田国男氏、その後は堀一郎氏が代表的であるが、近年、長野県、富山県等でも調査が進み、下伊那地方でも既に14か所もの13塚が発見されている。長野県の場合も、その位置、配列、形態、内部構造等全く本郡の群塚の場合と同様である。

13塚は全国的に分布しているが太平洋岸に濃く、中でも関東南部がその35%をしめているが、その性格について柳田国男氏は堀一郎氏との共著「13塚考」の中で「巷間伝えるが

如き埋葬塚ならざるは勿論，供養塚となす説にも疑問を抱き，もつと積極的な，村落安寧のための鎮壇，もしくは修法壇と推測」している。

各地の現状

高根町下蔵原（しもくらばら） 部落の東端を，中蔵原から若神子に通ずる道路が北西から南東に走っている。その道路に沿って，東側の山林中に14基の塚が一行に並んでいる。

ここは，須玉川の谷間を眼下に見渡す要害の地で，歴史的には多麻荘と熱那荘との境界にはぼ当たっている。伝説等は何もない。

No.	直径 m	高 m	次の塚との距離 m	備 考
1	6.0	1.0	80	
2	5.9	0.9	10	
3	4.0	0.6	7	
4	3.5	0.7	26	
5	4.0	0.7	3	
6	4.5	0.7	200	7号塚との間は畑，水田
7	5.0	0.8	15	
8	6.0	1.2	60	墓地の東南から東にあたる
9	4.5	0.5	200	10号塚との間は同じ山林中である
10	5.0	0.8	19	
11	6.5	1.2	16	頂上に大小の石3つあり，祝神
12	5.0	0.6	19	墓地の東北
13	4.5	0.6	18	
14	5.0			
単独	0.5	0.6	南に観音寺	他には附近に見当らず

高根町中蔵原 上蔵原との間，諏訪神社のすぐ北，旧墓地の東，山林。東へ約5度ふれて南北。

No.	直径 m	高 m	次の塚との距離 m	備 考
1	3.0	0.7	11	乱掘のあとあり
2	5.0	0.6	15	
3	3.5	0.7	15	道路で切断，真二つ
4	2.5	0.3	11	
5	4.0	0.3	11	乱掘のあとあり
6	4.5	0.5	14	

7	4.5	0.8	4
8	7.0	1.0	4.5
9	4.0	0.3	7
10	4.5	0.3	4
11	5.0	0.65	6
12	5.0	0.7	

高根町上蔵原 部落の西側，南北に一直列，八ヶ岳へ向かわずつつみ山を指向，墓地山，山林であるが，旧部落の跡らしく，屋敷を囲む土塁などが残っている。この塚は一様に低く小さい。

No.	直径 m	高 m	次の塚との距離 m	備考
1	3.5	0.35	13.5	
2	3.5	0.4	14	
3	4.0	0.3	13.5	
4	5.0	0.55	5	
5	4.0	0.3	5	
6	3.0	0.25	7	
7	3.5	0.3	4.5	
8	3.5	0.25	14	
9	3.0	0.3	13	
10	3.5	0.3	14	
11	3.0	0.2		

高根町宮地 高根西小学校の東，宮地部落の東側，山林が水田中に突出している。その尾根に5個の高塚あり。ほぼ南北に走る。

1号塚 南端にあり，最も大きく直径30メートル余，高5メートル余，頂上に盗掘の跡あり。

2号塚 1号の北，やや小，頂上に盗掘の跡あり。1・2号は地形的にも大きさからも古墳のような感じをうける。或は古墳を利用して13塚を築いたのかも知れない。

3・4・5号塚ずっと小さく，普通の13塚の大きさ。5号及びその北部に墓石がある。

さらに熱那神社の真東の山林中に単独塚がある。直径7メートル，高1.35メートル。頂上に盗掘のあとが2か所ある。これらの盗掘は何れも本格的なものでなく，収穫はなかったと思われる。

高根町大林 大林部落と建部神社の間あたりで町営住宅の南、佐久街道沿いの西側、山林中に1基ある。直径4.3メートル、高0.8メートル。上に石祠がある。最近まで、この7.80メートル北に大きいのが1基あったという。住宅建築のため潰したが何も出なかった。

高根町箕輪 熱那農協のすぐ裏の山林中に4基ある。この配列は不揃いで一定していない。

No.	直径 m	高 m	次の塚との距離 m	備 考
1	3.0	0.6	2	石祠あり
2	2.0	0.25	1	{ 1, 2, 3号は三角形に位置しその間に五輪塔など7組あり 急斜面にある
3	4.0	0.4	20	
4	4.5	北 0.5 南 0.9		

高根町箕輪新町 新町の上、大蔵寺西より少し下った所に1基だけある。土屋幸雄氏先祖の奥津城と称している。松、杉、雑木林の中で傾斜地である。直径6メートル、高1.3メートル。

高根町東横森 東横森と西横森の間で道路の両側にある。4基は西側は南北に並び1基だけ東側にある。藪が深く奥へ入れない。

No.	直径 m	高 m	次の塚との距離 m	備 考
1	4.0	0.45	13	道路の西側で南端
2	6.0	1.0	1.5	
3	7.5	1.2	4	
4	6.0	1.0		
5	5.0	0.7	2号との間3	道路の東側の1基

高根町村山北割旭 箕輪新町金比羅社と旭部落の間上、南北に通る道路の西側に2基。南北に並ぶ。

No.	直径 m	高 m	塚間の距離 m	備 考
1	8.8	1.3	10	頂上盗掘
2	4.5	0.8		頂上盗掘

高根町村山北割大久保 町役場から北へ農協を通り長沢へ通ずる道路の中程、山林の中。

見晴らしよし。ほぼ南北に走る道路に並行して両側にある。地元の人は「お塚」と呼んでいる。今回、調査した中では最も群集していた。ここは乱掘がひどい。何れも最近のもので、塚川発掘調査の刺激かも知れない。但し、掘った土が残っていないものもあるが、苗代にいられたことも考えられる。

No.	直径 m	高 m	次の塚との距離 m	備 考
1	6.0	1.1	4	
2	4.0	0.5	14	
3	2.5	0.3	4	
4	2.0	0.25	4	
5	2.5	0.3		
6	6.0	0.3	15	{ 3号との間14メートル低平, 掘った?
7	6.0	0.3	13	低平
8	7.5	0.9	16	真中の土をとってある
9	5.0	0.8	13	最近, 土をとったばかり
10	3.0	0.3	36	
11	3.5	0.5	14	
12	4.0	0.6	8	
13	3.5	0.7	7	
14	4.0	0.75		最近, 掘ってある
15	4.5	0.6	5	{ 9号との距離40メートル, 真半分に 切取ってある
16	3.0	0.4	20	
17	4.0	0.5	10	
18	3.0	0.7	20	真中を乱掘
19	3.0	0.4	20	
20	3.5	0.5		
21	3.0	0.4	3.0	15号との距離60メートル
22	4.0	0.5	5.0	真中乱掘
23	4.0	0.5		

高根町村山西割上ノ反 高根中学グラウンド南, 松林, 道路に平行して稜線上に2基が南北に並ぶ。それを北に延長したグラウンド内に学校創立でグラウンドを造る時まで5基あったという。これを更に北に延長したと考える場合, ほぼその線上に1基ある。北, 西, 東割の境界線近くで, くるめ塚(入定塚)と呼ぶ。およそ直径は6メートル, 高さは2メートルくらいで上に, 卵塔が一つ立っている。

No.	直径 <i>m</i>	高 <i>m</i>	塚間の距離 <i>m</i>	備考
1	4.0	1.0	9	南側にある
2	5.0	1.0		

なお、老が森の畑の中に近年まで3基あったが開墾してしまった。5尺くらいの高さで附近の黒い土を盛ったもので何も出なかった（耕作者大柴氏談）。字、御山（みやま）にも7基ぐらいあった（手塚向男氏談）。

長坂町大八田（おおぼった）下村（しもむら）の塚原，路の東側11基，少し（12度）西にふれ南北に並ぶ。熱那荘の西境，古い時代は夏秋村に属す。塚の間に江戸末，明治の石塔多数あり。

No.	直径 <i>m</i>	高 <i>m</i>	次の塚との距離 <i>m</i>	備考
1	4.0	0.35	2	真中が掘ってある 6号との間に石塔8基 8号との間に石塔4基
2	3.5	0.5	4	
3	4.0	0.4	4	
4	4.0	0.5	3	
5	4.5	0.8	3	
6	5.5	0.8	4	
7	6.0	1.3	5	
8	5.0	0.7	4	
9	4.0	0.6	3	
10	4.5	0.6	2	
11	4.5	0.6		

長坂町塚川（つかかわ） ほぼ北から南へ並流する鳩川，甲川にはさまれた低い丘陵（山林），その陵線上に一列に並んで11基，さらにその附近に11基分布している。今年，中央道遺跡調査団によって発掘したところである。

No.	直径 <i>m</i>	高 <i>m</i>	次の塚との距離 <i>m</i>	備考
1	5.0			頂上に少し掘った跡あり
2	7.0	1.3		
3	6.0			
4	5.0	1.1		
5	6.0	1.1	18	

6	6.0	0.91	19.5	石祠, 墓碑, 武井家奥津城 (大正4年の碑文)
7	8.0		18	
8	8.0		15	
9	6.0		16	
10	5.6		19	
11	4.0			
12	4.8	0.4		
13	6.0	0.62		
14	8.0	1.36		
15	9—11	1.29		
16	3.2	0.37 -1.39		
17	4.2	0.72 -1.44		
18	5.0	0.56 -1.36		
19	4.0			完全に掘られている
20	4.0	0.3		
21	4.0	0.3		
22	4.0	0.3		

(記入のない所は未測量である)

須玉町小尾 柳田国男氏の「13塚考」によると、小字黒森に13人塚があることが「旅と伝説」第9巻第4号に報告されている。かつて、この地が戦場となった時、討ち取った敵の屍を埋めたというのであるが、現存するや否や筆者は未調査である。

3. 考 察

13塚のことは、本県では殆んど未調査で、僅に前記「13塚考」の中に、4か所あげられているにすぎない。

- 北巨摩郡穂坂村宮久保 13塚 (郡志下)
- 〃 津金村上津金 13塚 (国志)
- 〃 増富村小尾字黒森 13人塚 (旅と伝説9ノ4)

中巨摩郡大鎌田村大里南耕地小字13塚、最後の大鎌田村(甲府市大里町)にも今は全く痕跡もみられない。甲斐国志の中にも、13塚のことは、宮久保、上津金以外には全く見えていないが、13塚と関係ありそうなものは2、3あり、何れも郡内である。現地については未調査であるが、13塚分布の濃密地帯である相模に接しているので、その習俗が伝わっていたかも知れない。

以上のほか、県内では、現存の主な史籍、郡市町村誌等を小字名に至るまで調査してみたが「13塚」なる文字、又は関係すると思われる記事を発見することはできなかった。軽々に断言できないことであるが、本県の13塚築造の習俗は地域的に北巨摩郡に盛行し、そのほかは相模に接壤した郡内地方にも行なわれたらしい。

北巨摩郡下に百数十基分布している小さい高塚群は、その分布状況、形態、構造等から考察して結局、これらは所謂、13塚系統のものに属すると考えられ、問題は意外に広く深いつながりを持ったものであることを知った。築塚の習俗は遠く古代に遡り、古墳の成立とも深い関係がある上に、さらに中世、近世の神、仏、道三教の信仰もこれに大きく関与している。いずれにしても、こうした古く大きい信仰の流れの中の一時期（中世？）の信仰跡であることは間違いない。人々の居住する村々に接近していることは人々の日常生活と深い関係があったことが想像される。

柳田国男氏の専門的見解は前記の如くであるが、これは御霊信仰やサへの神、クナドの神の信仰なども密接な関係があったろうと想像される。従ってやはり、墓所或は境塚というより、個人、家族或は村落全体のための供養所、修法壇であり、かつてそこの住民が精神上の防壁として、陰陽師、山伏、法師などの司祭の下に積極的な信仰心を表示したものと考えるのがよいように思われる。

4 遺物包含層調査

縄文文化初頭の遺物について

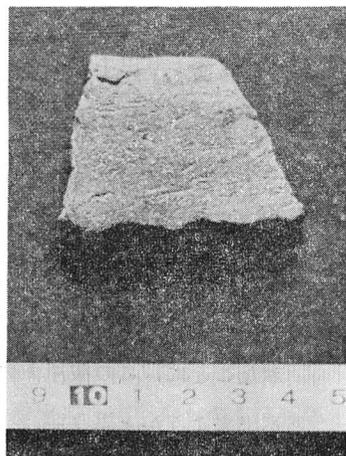
一北巨摩郡長町字東前田所在のNo132地点一

山本寿々雄

包含層の発掘地点の設定にあたっては、さきに日本道路公団がセンター杭標識をたてたNo.130及びNo.132地点の攪乱の範囲が狭い箇所を設定を決め、杭を設置するために掘られたローム層に混って出土が確認された礫器写真P24の3及び、センター両側25m以内の地点より黒躍石片P23の5の表面採集をもって発掘作業が開始された。

発掘区は第Ⅰ区(2.3m×9m)及び第Ⅱ区(1.5m×5m)とし各々表土層をはぐ(雑木林山中)

第Ⅰ層、表土層で、黒味のある腐殖土層20~25cmである。第Ⅱ層はやや粘性のある黒褐色土層で10~15cm位で共に遺物の包含は全く見られない。第Ⅲ層はややしまった感じの粘性ある褐色土層20~25cmで、その下部の位



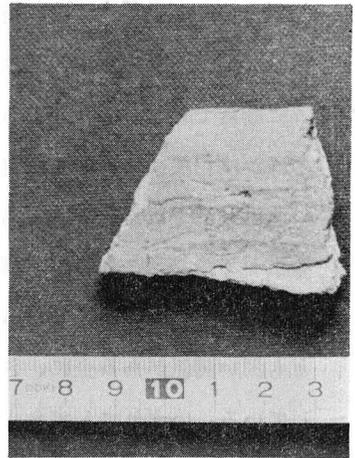
無文系土器(表面)

置より第Ⅰ区では礫器2点P.24 No1No2及び無文系土器P19.20片及び第Ⅱ区では打製石斧1点P25. No4の出土を確認することができた。

— 出土遺物について —

今回の発掘調査の目的は、以後引つづいておこなわれる発掘調査にさきがけてどのような層序を示しているかを、あらかじめ知る上での手がかりをつかむためのものであった。

出土遺物そのものの量は僅かであったが、予期したとおり第Ⅲ層下部から古い時期に所属すると考えられる縄文式土器片及び石器を検出することに成功した。

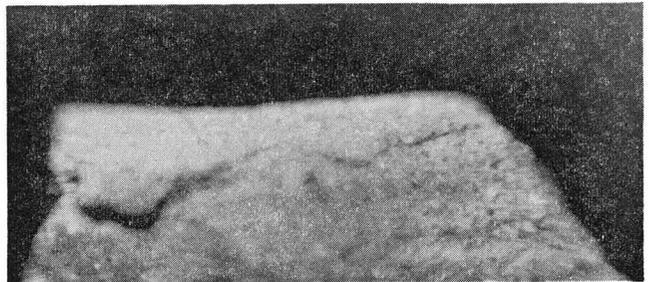


無文系土器（裏面）

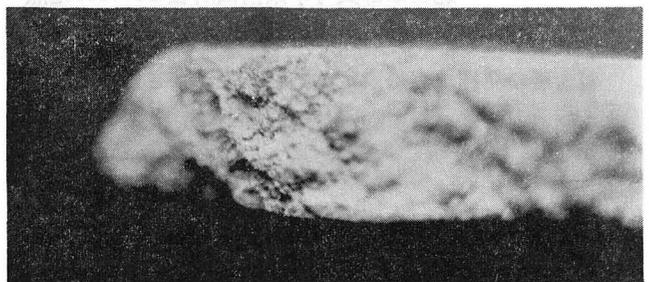
《 土 器 》

この縄文式土器片は第Ⅰ区第Ⅲ層の最下部より出土したものである。

無文系の土器であるが本郡下には出土を確認した前例がなく、山梨県内では僅かに ①都留市内大幡川涯面の第Ⅳ層より出土をみている同種の無文系土器及び ②本年7月発掘調査を実施した南都留郡河口湖町ウノシマB区第8層出土の例が層序的にはよりどころである。



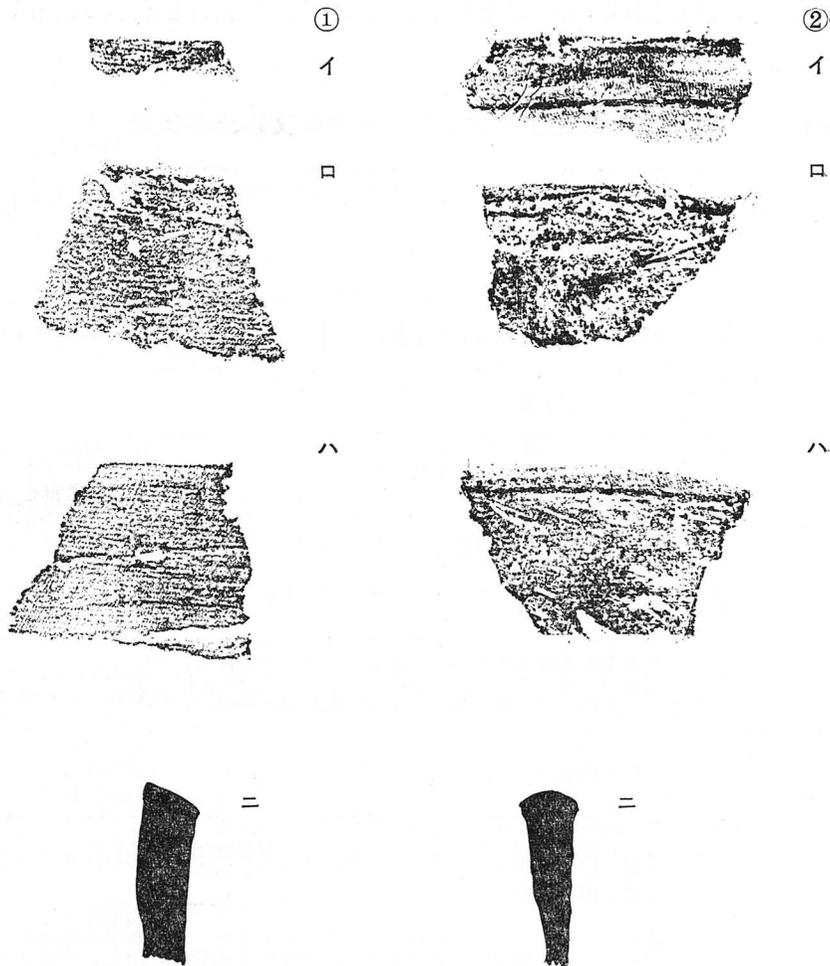
拡大写真



拡大写真

幸なことに、この破片1ケの土器は、口縁部のものであり、次のような特徴をあげることが出来ようかと思う。

即ち暗褐色で厚いところで9mm内外、（拡大写真参照）砂粒を含んでいる。口縁部の断面を観察すると、その先端がうすくうすくとなっている。



① 『東前田』 (イ) ……口唇部 (ロ) ……表面 (ハ) ……裏面 (ニ) 断面
 ② 『大幡川四層』 (イ) …… “ (ロ) …… “ (ハ) …… “ (ニ) “

この部分をつくり出すには、粘土をさらにうすくはりつけてヘラ状工具のようなもので引いた跡を有している。特に裏面においてはそのためにかすかな隆起を生じている。表面口唇部では粘土がはみ出した跡を有しているのも又特徴であろう。全体としては砂粒を含有しているために、調整の時に移動したらしい砂粒の跡を残す手法である。また口縁部は直口するらしい。この口縁部片を比較すると前述の大幡川第Ⅳ層下部出土の場合のものに類似点を見とめることが出来る。即ち暗褐色で、砂粒を含み、粘土をうすく口唇部上にのせ調整痕を残している。この場合粘土は、器面にはみ出さなくてかすかな微隆起になっているのが異なる点であろう。砂粒がその調整のために移動した跡や、この場合は指頭痕ら

しいものすら感じられる、焼成は余りよくない。口縁部は直口と考えられるが、丸味をおびているのも特徴である。

(付表) 日本各地域出土縄文文化初頭の無文系土器集成

1969 (山本寿々雄)

1	日向洞穴 山形県東置賜郡高島町	日向Ⅳ類, 無文平底土器, 特異な山形状文様の押形文を含める	加藤稔。山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化 山形史学研究 5号1967
2	尼子岩陰 同上	尼子Ⅱ類土器日向(Ⅴ類土器)「Ⅴ類ではなくⅥ類の誤りか 山本」	〃
3	神沢洞穴 同上	神沢Ⅳ類土器(日向Ⅴ類土器)	〃
4	一ノ沢岩陰 同上	一ノ沢Ⅳ類土器	〃
5	火箱岩洞穴 同上	第Ⅲ層(無文土器)第Ⅴ層(無文土器)	江坂輝弥。日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会 1964
6	むじな岩陰 同上	Ⅰ類は最下層厚さ3~8mm器面調整の庄痕あり口縁部外反直口, 凹凸の器面をもつ, Ⅱ類は, 器面調整はへら状工具様なもので横位又は従に。	未発表。佐々木洋治氏教示 高島町史第1巻に所収予定 1969
7	橋立岩陰 埼玉県秩父市上影森 708	赤褐色, 黒褐色等で3~4mm最下層出土, 口辺部外反する。	芹沢長介。吉田格。岡田淳子。金子浩昌。埼玉県橋立岩陰遺跡石器時代8号1967
8	平坂貝塚 横須賀市若松町45番地	平坂Ⅱ式土器無文あるいは擦痕のある土器黒褐色, 灰褐色, 口縁部外反。直口する口縁部から胴部にかけて8mm位のものが最も多い。土器内部表面に擦痕	岡本勇。相模平坂貝塚 駿台史学3号 1952
9	夏島貝塚 横須賀市夏島	夏島Ⅱ式土器。(僅少の無文, 擦擦文ふくむ)	杉原荘介。芹沢長介。神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚 1957
10	大丸遺跡 横浜市区六ツ川町大丸	第Ⅷ類土器。文様を全く欠いている仲間である。口縁部乳棒状少なく, 多くは円頭棒状まるみをおびた角頭棒状, 口唇部肥厚する。ほそく尖り気味もある小形土器も出現する。	芹沢長介。神奈川県大丸遺跡の研究 駿台史学7号 1956
11	大幡川断崖第四層 山梨県都留市大幡壁谷	A地点, B地点で厚さ7mm~8mm小石粒を含む。円底片あり, 口縁部直口。外反し焼成は普通かやや不良。細石核, 細石刃微隆起線土器を伴出する。	山本寿々雄。山梨県大幡川断崖砂礫層直上(四層)より出土した細石器, 有舌尖頭器及び「甲斐考古」10土器について 1967
12	河口湖ウノシマ遺跡 山梨県南都留郡河口湖町字湖中	第8層押形文絡状体を引ずつての条痕系土器, 擦糸文と混在, 下部層から爪形文隆帯文土器出土。口唇部の断面尖らず平坦, むじな岩陰Ⅱ類のNo1に共通性がある。	報告書未刊(山本寿々雄)
13	荷取洞窟 長野県上水内郡柵村	口唇部の破片他の微隆起線土器とは区別される。無文土器の中には薄手が少なくない。茶褐色, 胎土に雲母の細粒子を含む。只唇部は丸味を帯び直上口縁となるらしい。	小林達雄。長野県荷取洞窟出土の微隆起線土器 石器時代6号 1963
14	狐久保遺跡 長野県上水内郡信濃町	第四類土器 焼成のきわめて悪い作り内外とも赤褐色で5~6mmの薄手。胎土中には微量の雲母片混在。細破片が多い。	小林孚。長野県上水内郡信濃町狐久保遺跡緊急発掘調査概報 信濃20-4号 1968
12	石小屋洞穴 長野県上高井郡東村仁礼山	2~3mmの厚さ, 胎土には小石粒の含有が顕著, 概して黒褐色を呈す。Ⅷ層とⅦ層に包含されたものでは差がいちじるしい口縁は外反して開き口唇部は角ばる。直線的開いた口縁部。多少内彎する口縁部あり。	永峯光一。日本の洞穴遺跡 1967 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会 1967
16	九合洞穴 岐阜県山県郡美山町	Ⅱ群土器数片の無文土器, 胎土に繊維を含まず, 焼成は普通程度, 口唇部に刺突列点文を施している。浅い擦痕らしいものが, 縦に承る。裏面に多量の炭化物が付着厚さ8~9mm	安達厚三。日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会 1967
17	小瀬ガ沢洞窟 新潟県東蒲原郡上川村	①赤褐色厚手で丸底, 厚さ11mm, 表裏面よく研磨。②口唇部破片, 口唇は小さく外傾した直上形。表面は平坦で粗雑灰褐色5mm。③薄手土器指頭痕と推定される小起伏黒褐色4mm	中村孝三郎。小瀬ガ沢洞窟 長岡市立科学博物館 1960

18	帝釈馬渡岩蔭遺跡 広島県比婆郡東城町	第四層，無文土器は細片を含めて50片，表裏とも赤色を呈し，胎土には多量の繊維と砂粒がふくまれ焼成は悪く…平底押圧によるらしい巾6mmから9mmにおよぶ縦の細いすじ。輪積みの手法。	帝釈峽遺跡群発掘調査団。 (潮見浩) 1964
19	不動ガ岩 洞穴 高知県高岡郡佐川町	厚手無文土器……50余片……3～4個体分。いずれ資料の増加に伴いこれら厚手無文土器は3型式以上に分けられるであろう。	江坂輝弥。日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴調査特 別委員会 1967
20	上黒岩 岩陰 愛媛県上浮穴郡美川村	第Ⅵ層無文薄手土器	江坂輝弥。同上 1967
21	岩下 洞穴 長崎県佐世保市松瀬町	第Ⅷ層からは条痕文，無文土器と同様に爪形文土器出土。Ⅸ層から無文土器出土。	麻生 優。同上 1967
22	出水市上場遺跡 鹿児島県出水市上大川内	第Ⅱ層上部無文土器。下部は細刃器細石核と共に爪形土器伴出。	池水寛治。鹿児島県出水市 上場遺跡。考古学集刊3巻 4号 1967

さてこのように比較をしてみる場合，同じ縄文式土器の早期初頭に属するものと考えられる無文系の土器の日本各地域出土のものについても詳細に比較検討をしてみることも必要なことと思う。そのような意味もあって付表としてかかげておいた。今回の場合のものは，例えば，口縁部断面がうすく尖っている感じからいえば，或は ②相模平坂貝塚Ⅱ類にその近似性が求められるかも知れない。

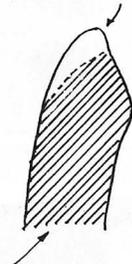
又最近，未発表ではあるが ③佐々木洋治氏調査になる山形県東置賜郡高島町内のむじな岩陰出土の第Ⅱ類土器（未発表）にも近いものとも考えられる。

（同氏高島町史第一巻に所収予定）

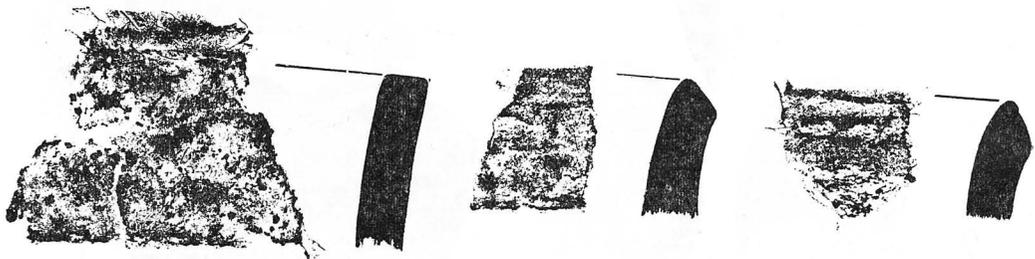
さらに昭和44年7月に発掘を実施した南都留郡河口湖町大字大石小字湖中地籍

佐々木洋治氏による

附加粘土帯



一次口辺断面
突端を反るさせる為
粘土不足になり約
二次的に附加して
調整



外反というより
直口きみ

①

→ 口辺部直口したもの

②

→ ②の内側尖端に粘土帯を附加し，口縁部の調整をしたもの

③

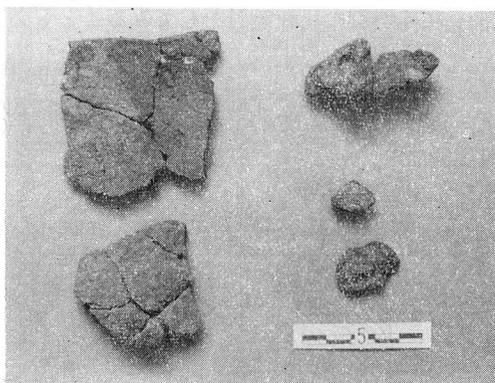
むじな岩陰 Ⅱ類

のウノシマ遺跡では、同様無文系の土器が、第8層から押形文（山形，楕円）絡条体を廻転せずに引きずってつけた条痕土器，撚糸文土器に混って出土する事実のあることが確認されるにいった。

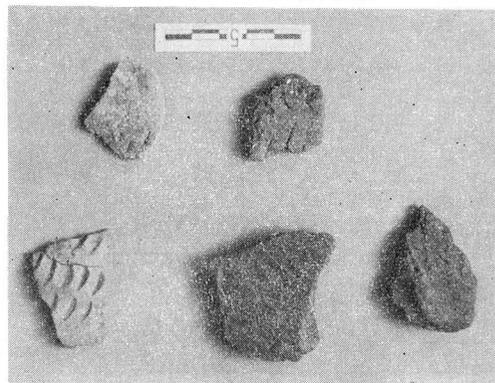
この場合の無文系土器は口唇部の断面が尖らずむしろ平坦であることは、むじな岩陰Ⅱ類のNo. 1 に共通している。（P23拓本参照）このようなことから、これらのものとの関連性も考えられてくるし（報告書作成中）この場合下層からは爪形文土器や，隆帯文土器が出土している事実からも考えてこの一片の縄文土器片のもたらす意味が理解できるものと思う。

（参考ウノシマ遺跡出土の事例第8層）

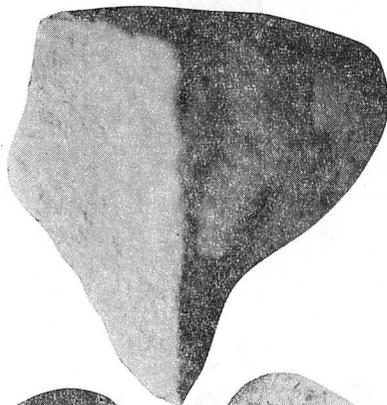
第8層の無文系の土器



最下部出土の隆帯文・爪形文土器



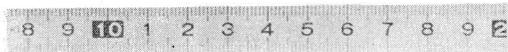
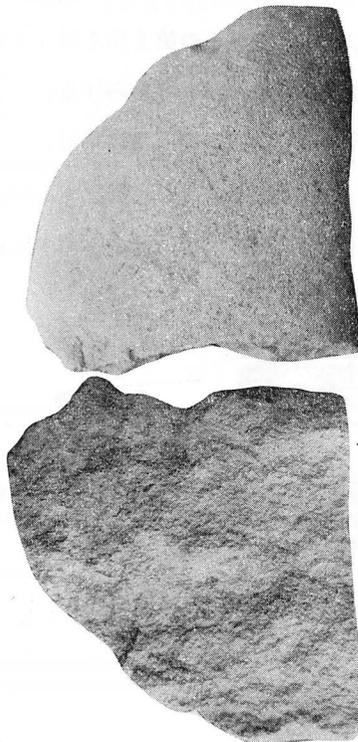
1



2



3



＜ 石 器 ＞

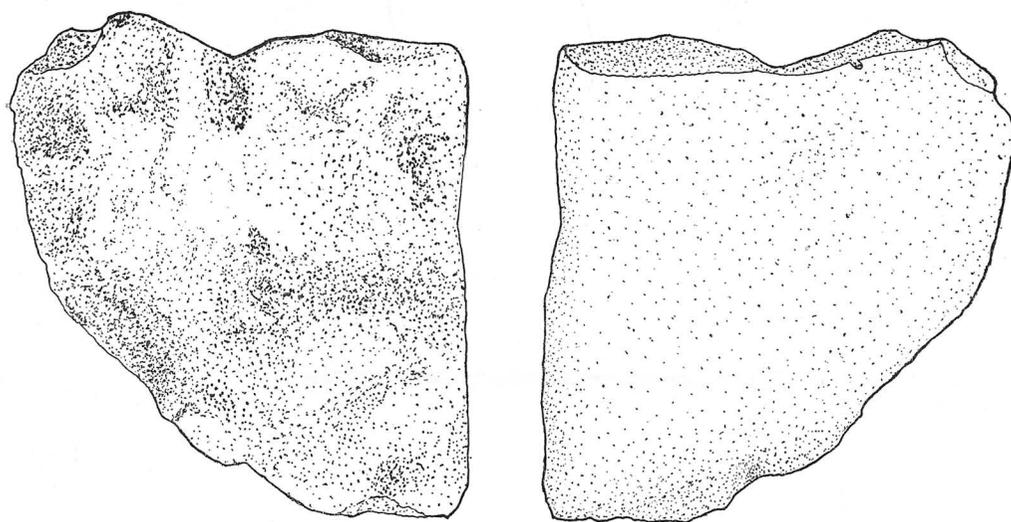
設定区の1区からは礫器2点共に複輝石安山岩製のもの及びⅡ区から打製石斧1点が検出された共に第Ⅲ層の下部からであり，縄文文化層の中で古い時期のものと考えられる。

(写真及び実測図参照)



参考(7)
 (都留市大幡川断崖砂礫層直上(第四層)出土の例)

礫器実測 1/2 (No132地点)



この種のものについては④大月市宮谷遺跡のB区2層下部出土の礫器。或は⑤上野原町談合坂包含層第四トレンチ（自然面を残している）のもの。富士吉田市大明見洞穴よりの出土品などがあげられるが、大月市宮谷遺跡出土の礫器に一番近いものと考えられる。

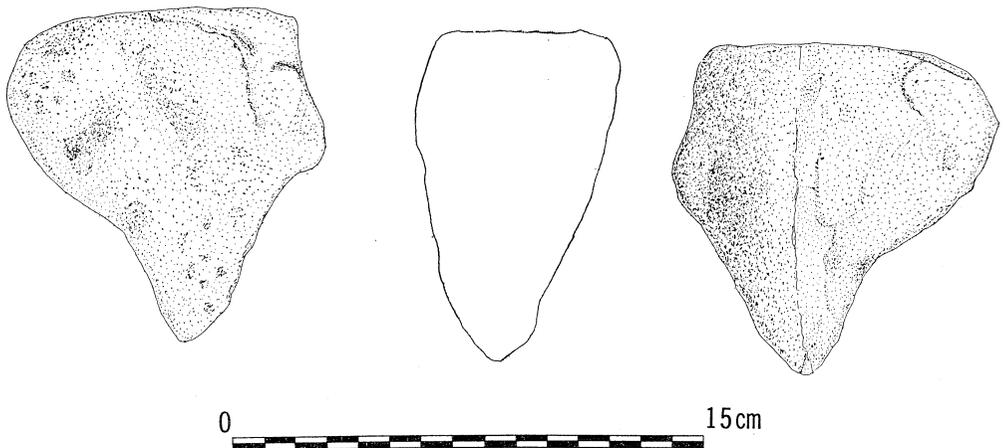
談合坂の例では自然面を残すとともに磨かれている。富士吉田市大明洞穴の例も同じ系統である。荒割の加工跡を残すことと自然面を残していることでは宮谷のそれと同じであることを注目したい。実測図1は長さ10.5cm巾10.9cm厚6.3cm。同2は長さ6.7cm巾4.9cm厚さ3.5cmの小型のものである。

又別に地区設定のきっかけをつくった No.132地点のローム層出土の礫器は（P25）長さ10.3cm巾9.8cm半割の厚さ3.1cmこれも複輝石安山岩のものである。実測図3は、第2区出土の石斧で打製長さ11.1cm巾4.4cm厚さ1.6cmで砂岩（Sand stone）千枚岩質のものである。なお別にセンター坑内から黒曜石製の石器1点がある。写真No.5

以上は今回の包含層班の調査結果の遺物であるが出土数は少ない他日の機会に考察を加えることにする。又石質鑑定は甲府盆地第四紀研究グループの藤本丑雄氏によるものである。

写真6は、東前田の無文土器表裏面。7は、左大幡川第四層下部出土の無文土器の表裏面である。

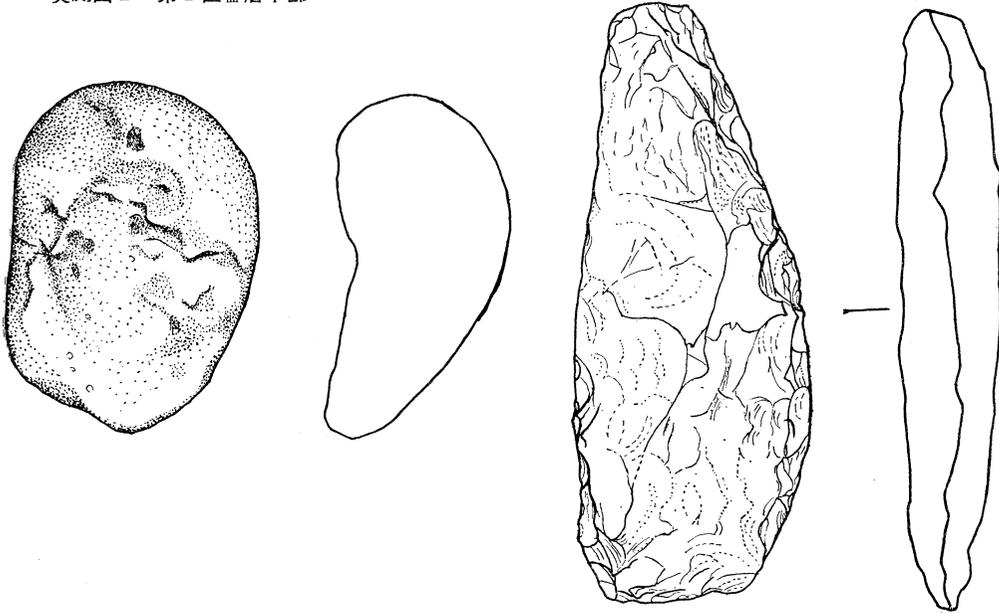
実測図1 第1区Ⅲ層下部



石器実測 1/2

実測図3第2区Ⅲ層下部

実測図2 第1区Ⅲ層下部



参 考 文 献

- | | | |
|---------|---|-------------------|
| ① 山本寿々雄 | 山梨県大幡川断崖砂礫層直上(第四層)より出土した細石器, 有舌尖頭器および土器について | 甲斐考古10 昭42 |
| ② 岡本 勇 | 相模平坂貝塚 | 騎台史学3号昭27 |
| ③ 佐々木洋治 | 山形県高島町むじな岩陰の調査 | 未発表 |
| ④ 山本寿々雄 | 縄文文化の出土遺物について(宮谷B区) | 中央自動車道発掘調査報告書 昭41 |
| ⑤ 同上 | 〃 (談合坂) | 同上 同上 |

東前田付近のロームの重鉱物組成

長坂付近のロームの産状は、上部から、表土，ソフトローム（黄白色），褐色ハードローム，浮石層（Pm-1：黄色ところにより，黄色の下位に白色の浮石層がある），青白色粘土，褐鉄鉱帯，青黄白色粘土，チョコレートロームと下部に重なる。

重鉱物組成は第1図，第1表のようになる。

○ 即ちソソ輝石，普通輝石，角閃石，磁鉄鉱，赤鉄鉱，不明鉱物（風化粒）などである。

ソソ輝石（38.6~40.4%），磁鉄鉱（48.1~54.3）が最も多く，普通輝石（2.5~7.7%）角閃石（2.8~0.5%），赤鉄鉱（0.5~0.9%）不明鉱物（風化粒，1.4~2.8%）が僅かに含まれている。

第1層から第6層まで全部が褐色ハードローム（brawn hard Laum）である。層序から見ると，上部のソフトロームおよび下部の浮石層（Pm-1）を欠いている。

組成的には殆んど同じである。

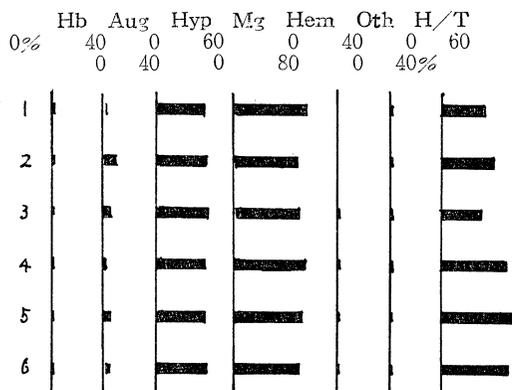
考古学上重要な石器遺物が産出したのは第3層である。

重鉱物組成から第2図，第3図穴山（次第窪）の浮石層の上部にある褐色ハードローム1.2.3.4に相当する。

組成の上から八ヶ岳山麓では北西麓の笹原（富士見と諏訪湖の間）に分布している新期ローム（北沢和男，河西晋平 1967）に類似している。（僅かに普通輝石が少ない）

八ヶ岳起源の新期ロームに対比される。（甲府盆地第四紀研究グループ）

長坂重鉱物組成 第1図

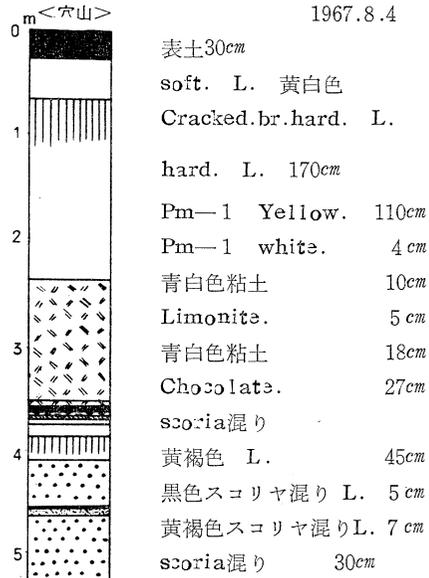


凡例 1~6 Sample番号 Hb: 角閃石
Aug: 普通輝石 Hyp: ソソ輝石
Mg: 磁鉄鉱 Hem: 赤鉄鉱
oth: 不明鉱物 H/T: 全量に対する重鉱物の量

長坂重鉱物組成 第1表
(藤本五雄 1969)

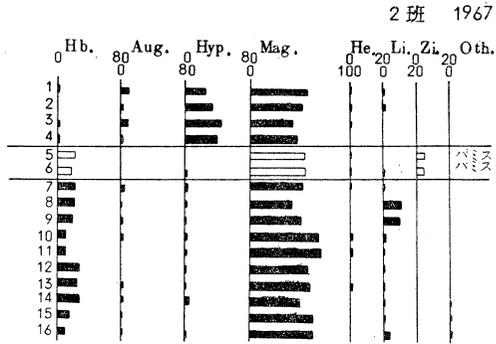
産状	層序	層厚	含有重鉱物	重鉱物組成
褐色ハードローム	1	33.3	Mg > Hyp > Hb > Aug > oth	Mg (54.0) Hyp (38.6) Hb (2.5) Aug (2.5) oth (2.5)
"	2	40.0	Mg > Hyp > Aug > oth > Hb	Mg (48.1) Hyp (39.1) Aug (7.7) oth (2.8) Hb (2.3)
土器産出層	3	30.0	Mg > Hyp > Aug > Hyp > oth > Hem	Mg (51.3) Hyp (39.4) Aug (5.4) Hb (1.8) oth (1.6) Hem (0.5)
褐色ハードローム	4	50.0	Mg > Hyp > Aug > oth > Hem > Hb	Mg (54.3) Hyp (38.6) Aug (3.9) oth (2.0) Hem (0.7) Hb (0.5)
"	5	55.0	Mg > Hyp > Aug > Hb > oth > Hem	Mg (51.3) Hyp (38.7) Aug (4.9) Hb (2.3) oth (1.4) Hem (0.9)
"	6	53.8	Mg > Hyp > Aug > Hb > oth > Hem	Mg (49.1) Hyp (40.4) Aug (4.6) Hb (2.8) oth (2.6) Hem (0.5)

口一ム柱状図(第2図)



(甲府盆地第4紀研究グループ 1967)

穴山(次第窪)重鉱物組成



(甲府盆地第四紀研究グループ 1967)

- Hb. : 角閃石
- Aug. : 普通輝石
- Hyp. : しそ輝石
- Mag. : 磁鉄鉱
- He. : 赤鉄鉱
- Li. : 褐鉄鉱
- Zi. : ジルコン
- Oth. : その他

2 遺跡の発掘調査概要

(1) 1・10・11・12号塚

上野 晴 朗

(i) 塚の形状と地貌

第1班の調査した10号・11号・12号塚は、第2班の調査した7・8・9号塚の丘陵線より西に18m余離れ、やや西に微傾斜した中腹のほぼ同一の等高線上に南北に並列して占地していた。なお付近にやや不規則な配置で13号、14号塚が点在する。(分布図)このうち14号塚は、云承では古墳やも知れないと、かつて乱掘をうけ(遺物は全く認められなかったといわれる。)塚の原形をとどめず、凹状に窪地が出来ている。第6号塚は7号塚より小径をはさんで北に立地し、ほぼ平坦地に占地しているが、小径によって南側の基部をけずり取られている。1号塚は最も小さく、西にやや微傾斜した地形に占地し、東側のやや大形の塚まで13m余離れている。調査対象となった10・11・12号および6号、1号塚の計測結果は次のとおりである。

No.	南 北	東 西	盛土の高さ ローム層より	内部遺構	出土品	調査日時
10号	4.90 ^m	4.60 ^m	1.02 ^m	な し	な し	3.25~3.28
11号	7.17	5.20	1.05	な し	炭わずか	3.21~3.24
12号	4.60	4.75	1.08	な し	炭わずか	3.21~3.24
13号	3.65	3.75				
6号	6.00	6.00	72	な し	炭わずか	3.29~4.6
1号	5.80	5.30	50	な し	炭 焼土あり	3.29~4.6

以上のごとく、その塚形はほぼ円丘をなしているが、盛土は微量で、いずれも基部が定かではない。10~12号は特にその間隔がせまく、10号と11号の間が約1m、11号と12号の間が約1.50mで、ほとんど区別があるかなしか位であるが、それだけに10号の中心点から13号の中心点までの距離もわずかに12.50m、10号と11号の中心点距離は6.15mと小さい。6号、1号の高さが余りないのは、ともに頂部の原形が崩れたからであろうが、とくに1号は僅かに高さが5.0mで、そのかわり基部が割に広がっているのは、盛土をならしてしまったからであろう。

発掘調査前における地貌の観察は以上のごとくであったが、なお下草を刈り、地表面を清掃して盛土の様相を調査してみたが、6号および10号に、各1個ずつの砂岩の礫石が見つかったほかは、他には全く小礫石もなく、須恵、土師、かわらけ等も発見は皆無であった。

(㊦) 発掘調査の経過

塚の形状が比較的原形をとどめていると思われる10、11、12号の内部構造の調査に当たって、われわれは、ほぼその中軸線上に、即ち10号は東西に、11、12号は南北にそれぞれトレンチを入れる計画を立てた。(第4図)これは該塚の性格が北巨摩郡下に特に多い高塚群の一例として(山梨県北巨摩郡にみられる高塚群について 野沢昌康 甲斐路特集号)その内容がほとんど不明であること、またボーリング等の結果からも、高塚が古墳や富士塚、経塚などと、その性格が著しく相違している点を考慮し、主として盛土の性格を究明することに主眼をおき、3基の塚をそれぞれ東西、南北に真二つに割って、その地形、傾斜度、立地条件、ローム層との関係を分析してみようとしたものである。従って10号は幅1.5mのトレンチを東西に入れて、ほぼ塚の南半分を切り、(第3図)11号、12号は幅1.5mのトレンチを、それぞれ南北に入れて、塚の西半分を切断する方法をとってみたのである。(第4図)

次に6号、1号塚は丘陵頂部のわりに平坦地に構築されていたのでそれぞれ東西に割って頂部付近のローム層上にどのように位置づけられているかを確認することとした。

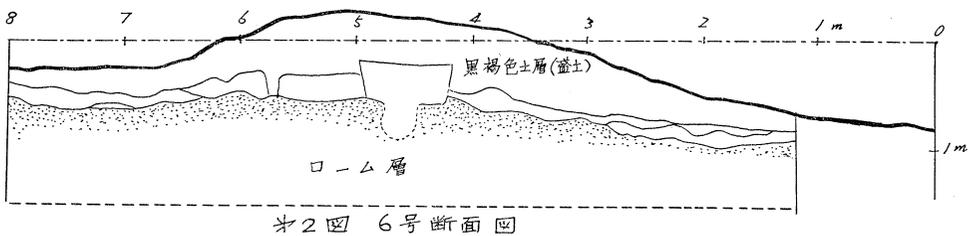
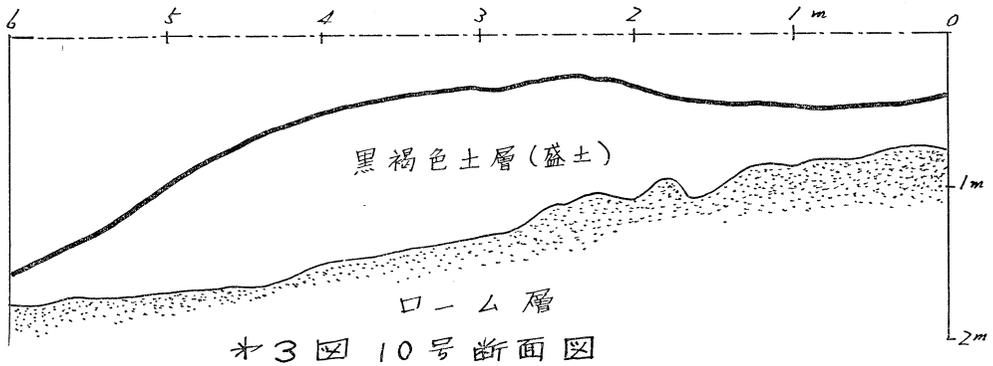
(第6図、第7図)

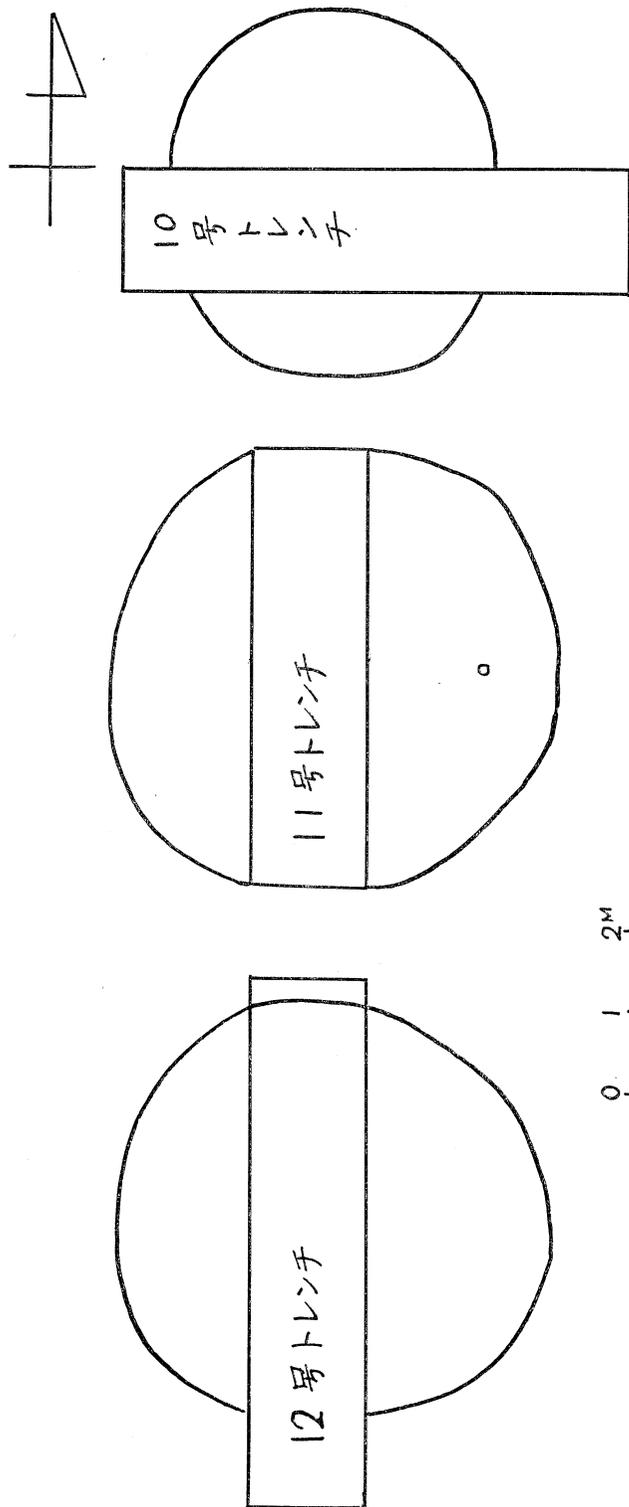
その結果は、塚の築造に当たって、特にローム層を切取り、もしくは掘込んで、塚を築いた形勢はどの塚にも見られず、二層、もしくは三層の黒褐色の腐植土層の上に盛土が築き上げられていることを知った。また二層、三層の腐植土は明瞭なものではなく、著しく入り混じっており、塚の構築時に二層、三層に入り混じったものの如くである。また盛土に使用の土は、遠方から運んできたものではなく、塚の周囲の土をかきよせたと思われ、とくに塚群がすぐ隣接して並列している10~13号塚の場合を見ると、傾斜した丘陵の縁を多く削り取っているために、遠くから眺めるとテラス状に平らに見える。また塚を築造のために削り取った場所は、ローム層までの層位が著しく浅い。また傾斜度の強い地形の塚は盛土が低い地形に余計に盛られているために、平坦部の塚(1号、6号)に較べて基部がやや厚みをもっている。

内部構造は発掘の5基ともに、全く特殊な遺構は認められなかった。すべて単純な盛土の性格を持ち、従って遺物等も塚に結びつくものはなに一つも発見されなかった。以下は各号の内容である。

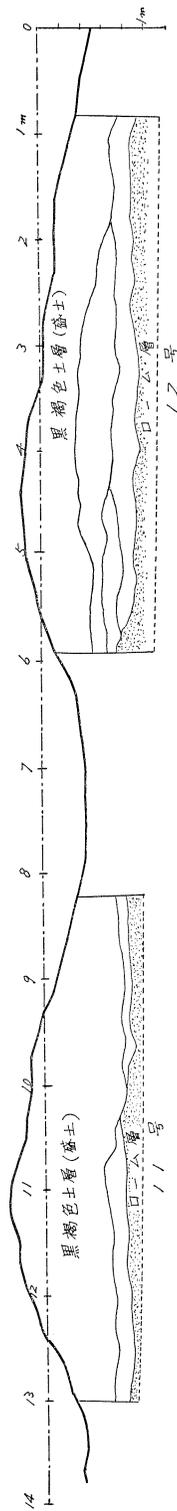
10 号

前記のように、塚上の表面に砂岩の礫石1個があったのみで、内部はローム層に至るまで、まったく遺構も遺物らしきものも検出できなかった。トレンチは東側は表土から40cmで早くもローム層となり、西側は地形が傾斜しているのでローム層との区別は明確さを欠いていた焼土、炭などの発見もなく、盛土はローム層にいたるまで概して柔らかく、盛土層は二層もしくは三層に見えるが、他の塚と違って腐植した黒褐色土層がとりわけ定かという程ではなくて、セクションが取りにくい程であった。

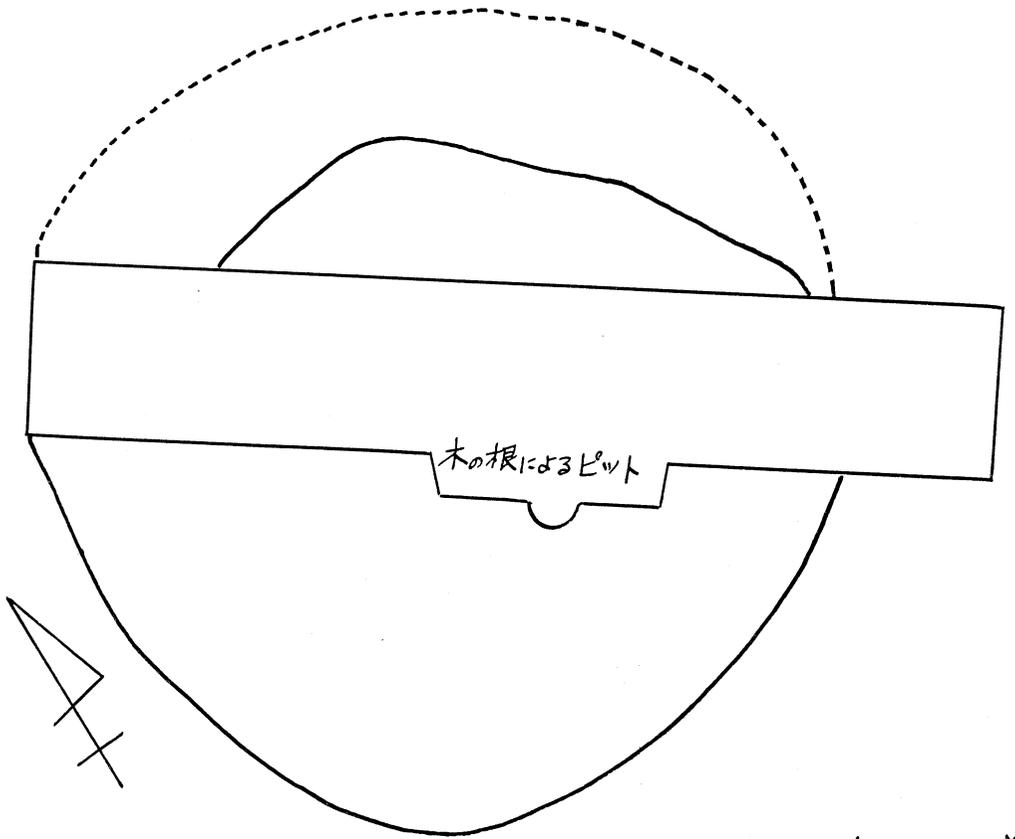




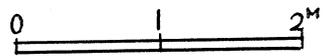
※5図 10.11.12号トレンチ図



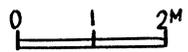
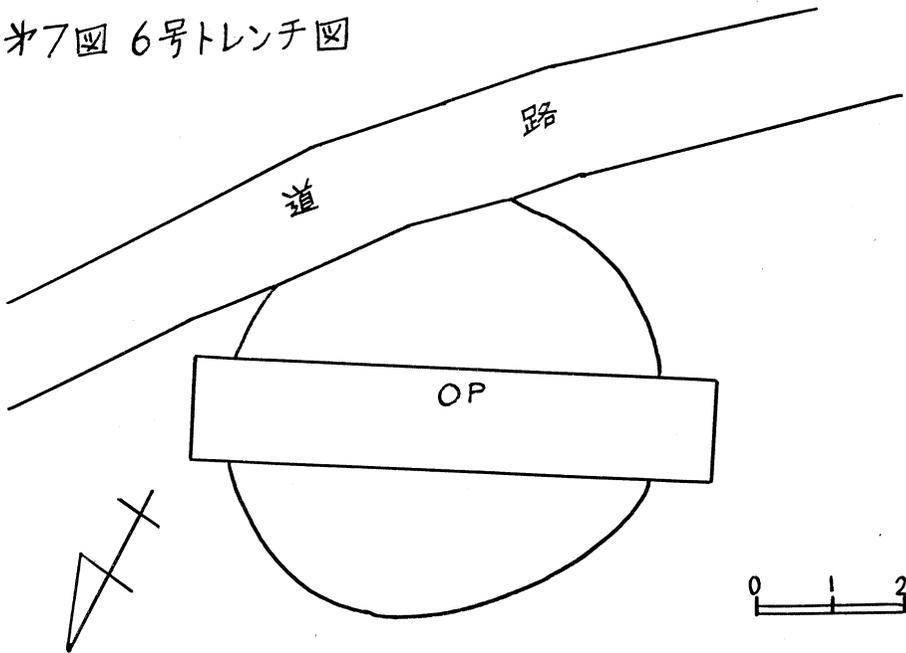
※4図 11号.12号断面図



※6図 1号トレンチ図



※7図 6号トレンチ図



11 号

本塚もローム層をとくに掘りこんで盛土した形勢は見られなかった。内部遺構も遺物もまったくなかったが、盛土の深さ30~40cmから炭のごく微小のものが2ヶ所ほど検出された盛土は10号と同様に柔かく、ローム層にいたって急に固くなる。盛土層は二層明瞭に現われており、上層にロームの混土がかえって多かった。

12 号

本塚の盛土層は三層もしくは四層に分れていたが、やはりここでもローム層に切込んだ様子はなく、もちろん遺構も遺物も内部から発見されていない。ただし11号と同じように盛土中、深さ20cmから40cmにかけて焼土と炭が僅かながら検出できた。盛土は柔らかく、ローム層にいたって固くなる。

6 号

本塚は、ほぼ平坦地に立地しているが、やや西に微傾斜をもち、それが盛土の層位変化にも微妙に影響している。(第2図)頂部からローム層まで僅かに72cmで、盛土は二層もしくは三層の条線をつくっている。マウンド西隅、表土から20cmのところから砂岩の礫石1個が検出された自然の混入と思える。盛土の基部両端をみると、東側は表土からロームまで僅かに30cm、西側は35cmと非常に浅い。内部遺構および遺物は検出できなかったが、塚中心部真下に1個のピットを発見、穴の大きさ径35cmほどのもので、そこを1m幅に一応残して周りから検出していったところ、木の根を発見した。これは1号と同種のものと推定された(図版 No.12 参照)但しその付近から僅かながら炭と焼土を発見している。

1 号

本塚も、ほぼ平坦地に立地しているが、全般にはやや西に傾きをもちごく微小の盛り上りをもった塚である。(第7図)頂部からローム層まで僅かに50cmの塚形しか示していないがこれは基部の径6m近い大きさを考えるとき、いかにしても低く、恐らく盛土を削ってしまったのであろう。表土からローム層まで平均40cmであるが、盛土にあたって、ロームを削った跡は見当らなかった。この塚には6号と同じように塚の中央に木の根が垂直に立って腐植した様相がそのまま残されていた。それはすでに腐植土と化しており、それを掘りこんでいくと、1つのピットとなった。(図版No.1)これは6号でなんであろうかと悩んだのだが結局自然のいたずらだったわけである。ただ注意すべきは、ここでも40cm前後からロームの近くに焼土と炭のごく微量ながら検出された。また盛土は一層もしくは

二層の腐植土層が見られ、この塚は他に較べてやや黒味が強かった。

内部からは遺構も遺物も全く発見されていない。

以上調査の概要を通して言えることは、この高塚群は、内部に特殊遺構も遺物もともなっていないが、しかし盛土の中間からローム層の近くにかけて、炭もしくは焼土の微細な検出を一樣にもなっていることである。また塚の中央部に6, 1号のごとく、一本の樹木を植えているものがあり、それが長年月の間に粘土質の固い層となって、ピットのごとく検出され、人為的な姿をとどめていることである。

飯島 進・谷口一夫

(2) 7. 8 号 塚

(1) 塚の形状と地貌

7号塚小丘発掘調査

7号小丘は発掘第2班（飯島進班長）の手により作業が進められた。一部小丘測量の結果東北部に破壊の痕跡がみられたが、南北8m、巾1.5mの発掘トレンチ内に於ては保存状況は良好で、所謂原形をほとんど残されているものと理解される。調査の結果本小丘は全て盛土で、その土砂は遠方より運んだというよりは主に小丘東部からのかき上げという姿が想定させられる。

7号小丘は底部基盤に至るまでは何ら遺物の確認がなく若干盛土間に小さな礫及び型式名の判定困難な土師器小破片が二三認められたが、その位置及び状況からして小丘築造時に偶然混入の線が強い。つまり人為的に埋葬されたとは考えられない状況にある。然し乍ら底部に至って縦200cm横170cm、深73cm楕円状矩形の落ち込みが小丘中心部に確認された図版No7この落ち込みは、入口部分（南西）に段がつけられており一応本小丘の内部構造として取扱ってみても良いものである。所謂埋葬の目的に造られた遺構であることは充分に認められる。しかし、この落ち込みの中に何の遺物も残されてなく、本小丘の充分なる性格を知り得る完全資料はついに確認出来なかった。

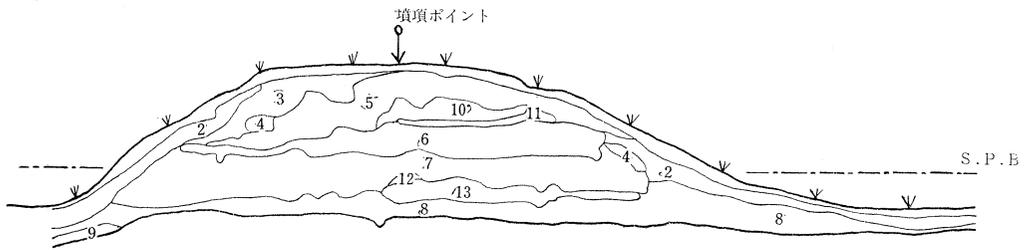
8号小丘発掘調査概況

飯島 進・谷口一夫

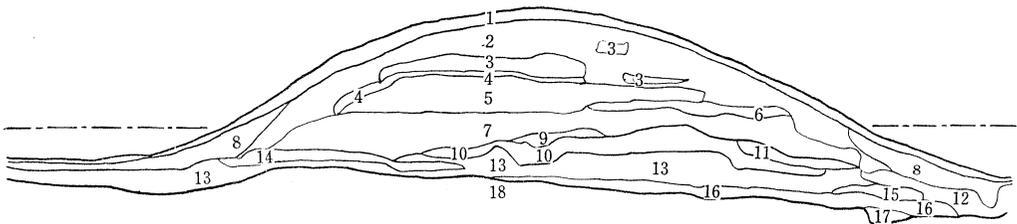
8号小丘も7号小丘と同様発掘第2班（飯島進班長）の手で調査が進められた。8号小丘は7号小丘の頂上部との間隔は12mで南方に一列に位置している。8号小丘は7号小丘と同様かむしろそれ以上に良好な形状で保存されている。7号と同様に発掘調査の結果は小丘の全てが

盛土であり、それも小丘東側よりの土砂を盛上げた様な形跡が確認出来る。

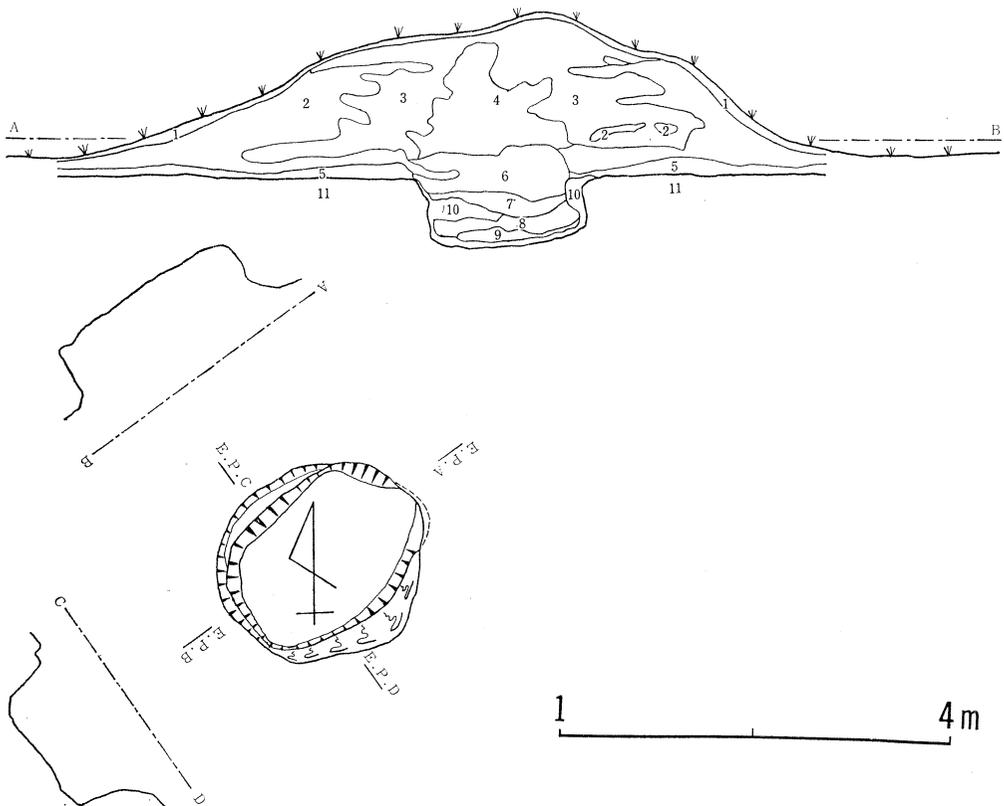
8号小丘南北、東西セクション実測図



7号小丘南北セクション実測図



7号小丘底部遺構実測図



一般的に8号小丘の盛土は西南方向に流されている。発掘調査は小丘中心点にはぼ東西、南北と十字に切り北西部をA区、北東区をB区、南西部をC区、南東部をD区と設定し、D区を除きA区、C区、B区の順に進められた。この結果A区発掘に於て小丘北端のセクション最下部に於て溝が確認された。溝の規模は約30cmほど掘りくぼめられており、明らかに8号小丘築造時につくられたものであることは確実と思われる。

遺物は7号小丘と同様に明らかに埋葬されたと思われるものは確認出来ず、偶然混入と思われる状態で土師器の小形破片1点、手づくねの土器底部破片1点それに河原石がロームの硬質ブロックが板状になっている周囲から出土した。この8号小丘には7号小丘にて確認されたような基盤に掘りくぼめられた内部遺構は最後まで確認出来なかったが、あるいは硬質ブロックが板状になっている、この辺が内部主体に核当するものでないかと思われる。

また、この部分に直立し炭化した細い木が四本円形状で存在したが、これは最終的に木の根であることが判明した。C区に引つづきB区の盛土がはがされたが、このB区に於てもA区で確認された溝が認められた。その形状は8号小丘の盛土にそって丸みをおびている所から周溝のごときのものである事が想定させられた。8号小丘のA区、B区のセクション壁を取り、東西セクションを出したが盛土の状況は基盤面直上2～3層、及び中央部はそれぞれ水平に推積していた。溝も中心ポイントよりC、D区を除いた二区から発見され、ほぼ周溝であるとみられる。この周溝には腐蝕土が流れ込みレンズ状になっている様である。B区に於ける石は3個あり、丸い河原石の一つは小丘頂と基盤の中間に存在し、割れた7×4cmの石はそれより10cm下方に存在、もう一つの河原石は小丘東端の基盤上に存在していた。調査によるといずれの石も関連性にとぼしい。C区では基盤直上まで掘下げたが、部分的に堅い層があった。この層はA区のネンド状の層とは違い若干柔かい感じである。

なお、ここから上層で土師器の小型破片が一片出土したが流れ込んだものと想定される。

なお、A区のネンド状の層位は東西セクションの対比される層にブロック的に存在するようであった。

結局、8号小丘にあってはD区を残し盛土の全てをはいだが、A～B区に亘り周溝と思われる遺構の確認が出来た以外は明らかな内部主体の存在は明らかに出来なかった。

なお、B区小丘中心点の基盤は若干高くなっており、この中に若干のカーボンが確認されたが、あえて指摘するなら8号小丘の内部主体は7号小丘と違い基盤上にあったものと理解して良いと思われる。

周溝と思われる遺構については地形が西に下がっているので東側は溝が深く、西側に浅くな

る形状を呈してその巾は1 m程度、深さは25~30 mで中央に深く、セクションはゆるやかな弧を成している。

7・8号小丘発掘調査に基づく所見

7・8号小丘とも、当初予測された通り、時代を判別し得る遺物の出土はみられなかった。然し、この東前田丘陵上に占地した小丘群の中にあつて、7・8号小丘は比較的大型の部類に属し、かつ盛土の堆積状況が良好に保存されていたので、或はこの地方小丘群の性格が考古学的に解明されるかも知れぬとの期待もあつたのであるが遂に良好な資料は存在しなかった。顕著な遺物の存在がない以上考古学調査として、いたずらに本小丘群の性格を論ずるわけにはいかないで、まずその点を御了解願いたい。

若干出土した小型土師器片、及び河原石及び割石については、本小丘群の性格を知る上で直接的に参考にならないと判断した。

しかし、7号小丘にみられた内部構造と思われる遺構及び、8号小丘にみられた周溝とみられる遺構は新たなる資料として提供出来るものと思われる。今後類例遺跡の調査によって、この種遺構の解明に努める必要を痛感した次第である。

なお、7、8号小丘発掘調査に於ては、時間的都合もあり、より詳細な解説が加えられなかったが、これは他日の機会をまって改めて報告したい。

最後に、7、8号小丘発掘調査に尽力下さった上川名昭、川崎義雄両氏、及び発掘及び図版トレースに献身的努力を下さった末木健氏等に改めて謝意を表する次第である。

(四) 発掘調査の経過

東林古墳群発掘調査の第2班の作業は、他の各班に比べて、作業量は一番多かった。というのは、受持った小円丘は僅か二基であったが、他のどれよりも大型であったことと、その内部構造が、7号丘については、封土の層位が過去の盗掘？攪乱を物語るように大変乱れていたこと、及び基盤下部に、大きな地下坑が存在していたことと、8号丘については不可解な配列をもった、何かの遺構かと思われるような4ヶの河原石の存在、及び極めて素朴な形状をした小型の手づくねの土器、そしてそれらと略同じ層位にあった、祭址遺物的ニェアンスを帯びた四本の炭化？棒状物更に円丘の中心部よりやや北側の基盤下部に発見された径15cm深60cmの円型ピット、或は外周の北方より東方にかけての周溝様の凹地の発見等があったからである。

この遺跡は東林古墳群という名称の通り、吾々も一応古墳の発掘としての心構えで臨んだのであり、従って7号丘の地下坑も、当然古墳の内部主体部分として慎重に取扱ったのであった。特に地下坑を埋めている土質が上部封土とは全く異った、甚しく砂粒を含んだ黄色土質であった。

北巨摩地方には、各所にこのような、数基乃至10数基よりなる小円丘群が散在し之等に対する言い伝えも種々様々であり、未だ一度も正式に発掘調査されることなく、次第に姿を消しつつあるのが実情であるので、それらを含めて、東林一帯合計30基にも及ぶこれら小円丘の実体を解明出来るものと期待をかけたのであった。同時に着手した第1班担当の5基の発掘が終ってそれらから、何も掴むものがなかったとの報告も伝わっていた丈に、期待は更に大きかった訳である。

この7号丘の内部主体部分を発見したのは3月21日であったが、特に慎重を期し、当初設定した南北中心線より東側、巾1.5mのトレンチの東面壁の層位の実測を終り、更にマウンドの西北部分、つまり地下坑部分を含む封土を全部除去した後、漸くこの部分に手をつけたのは3月27日のことであった。

また、8号丘は当初、マウンドの北西 $\frac{4}{1}$ を除去する方法をとり、この部分の東西中心線附近に上述の石組や炭化？棒状物が現われたのでそれらを微細実測した後、南西部分 $\frac{4}{1}$ を除去、この部分からは、何物をも発見出来ず更に東北 $\frac{4}{1}$ を除去この部分からは基盤上の木炭片の散在及びピットの発見等のため、日時を要したのであった。

さて、この小円丘群の実体解明のために、多大な関心をそそられた7号丘の地下坑であったが、結局、内部からは何物をも発見することは出来ず又有機質的遺物すら見出し得なかつ

た。

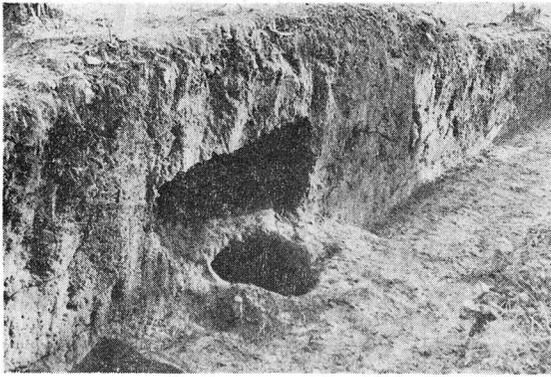
この地下坑の計測及び8号丘の内部存在物等の微細については別項の通りである。

こんな訳で、1班3班の調査が終り、皆引きあげたあと、私共2班は尚数日の日時を要したのであった。

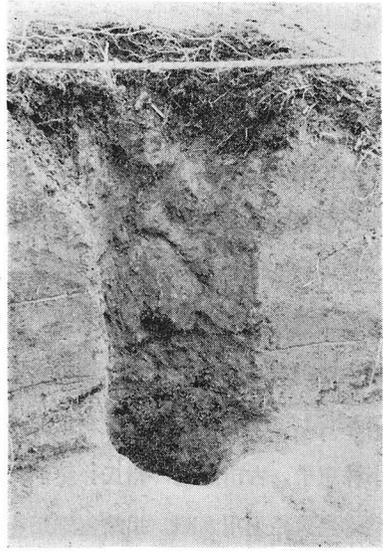
この調査における4班(測量, 実測班)と2班とは、主として私共山梨考古学会のメンバーの受持であった。分部桃彦, 渡辺八郎, 渡辺敏雄, 鈴木馨子, 沼上順次, 三浦美世子, 東条博道, 渡辺礼一, 内藤照演, 日向すみ江, 鈴木謙次, 前田寿秀, 末木健の諸氏, 日川高校生の山本しげ子, 岩波ますみさん。更に3班の調査の終ったあと、引続いて私共の2班に手を貸して下さった都留文科大学の森本圭一, 石黒良作, 高間幸恵, 岡本啓子, 河西やよい, 小林恵子, 古市金司の諸氏, 更に, 東京からはるばる応援, 指導に当って下さった日本考古学協会の上川名昭, 川崎義雄氏を交えて, 延べ100人に余る人員の協力であった。

陽のあたらない森の中の、ところどころに雪さえ残っている枯葉の上に、最初のスコップを入れた3月21日から3日間は、八ヶ岳おろしの吹き荒ぶ大変寒い日続きだったが、そのあとはずっと暖かく、最後の29日、0日は雨に降られての作業であった。日野春駅前の旅館での合宿は、決して充分の環境とはいえない難いものであったが、他班が調査を終って引きあげたあとは2班丈の合宿の観を呈し、毎夜のミーティングも、自然7号丘8号丘関連のテーマに絞られて、上川名昭氏指導の下に有益なディスカッションが行なわれた。この間に、秋山アキラ氏寄贈の日本酒、勝村すみ子氏寄贈の鮪肉8kg、玉子200ヶ大型角ハム2本等合宿員の戦力維持に大変有効であった。

長期間、終始熱心に作業をつづけて下さった参加者各位に、心からの謝意を表する次第である。



図版2 6号塚
中央のピットは木の根が腐って穴となっている



図版1 1号塚
中央の木の根の穴が特殊遺構のように見える



図版3 11号塚
左側偶に炭発見



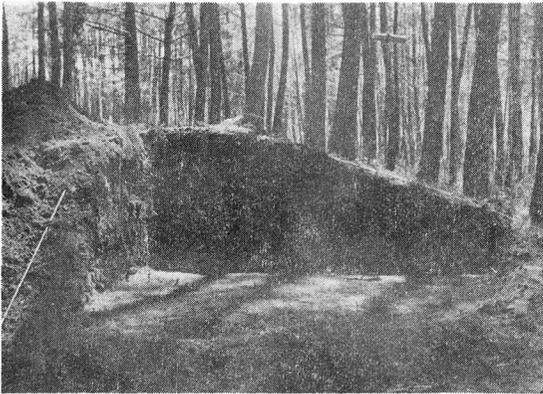
図版4 11号塚
48cmで炭片発見 中央の黒い部分



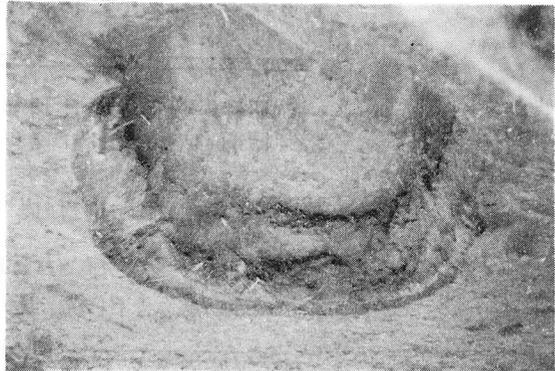
図版5 12号塚
40cmで焼土と炭発見



図版6 11.12号塚トレンチ



図版7 7号塚



図版8 7号塚底部遺構

調 査 組 織

1. 調 査 主 体

山梨県教育委員会

2. 調 査 担 当 機 関

中央高速自動車道韮崎小淵沢間山梨遺跡調査団

団 長	井 出 佐 重
副 団 長	野 沢 昌 康
調 査 員	仁 科 義 男
〃	三 枝 善 衛
〃	飯 島 進
〃	上 野 晴 朗
〃	山 本 寿 々 雄
〃	谷 口 一 夫
〃	森 和 敏
幹 事	中 楯 仁 兵
〃	小 尾 甲 一
〃	平 島 雅 郷
〃	波 木 井 市 郎

昭和45年3月25日印刷

昭和45年3月31日発行

発行 山梨県教育委員会

中央高速自動車道韮崎小淵沢間

編集 山梨県遺跡調査団

